奇妙な日々

山本吉矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
奇妙な日々

【Ｎコード】
Ｎ３７５７Ｊ

【作者名】
山本吉矢

【あらすじ】
夏休みのある日、幼馴染みと一緒に旅をする事に。
その先で出会った不思議な出来事とは！？

第1章　ピラミッド（前書き）

この物語は【妖魔界】の純粋な続きではありません。

また物語の性質上、作者が行った事の無い場所が舞台となっていますが、その情報は全てネットから入手しています。

その為、本当の場所と違う場合がございます。

予めご了承ください。

第1章　ピラミッド

僕はとても不幸である。
そう思う時がある。
その原因が・・・。
「おっはよー！起きてる？」
今日も隣の家の窓から家の窓まで侵入して来た、この幼なじみが原因だ。
うちの両親と、隣の家の両親が仲良くなってから約２０年。
待望の子供が生まれたのが仲良くなってすぐ後の事。。
そして・・・。
あとは良くある話で、両親達が勝手に許嫁として決めてしまった。
それでも、子供の頃は別に良かった。
その意味を分かって無かったから。
だが・・・。
今ではお互いに、いい年頃。
その意味も分かって来る。
しかし・・・。
あまりにも小さい頃から知ってるから、逆にそういう感じにはなれない。
何せ・・・。
今日も、隣の美喜子はパジャマ姿のまま僕の部屋へと入って来ているからだ。
「起きてるよ・・・。だいたい美喜子が来る時に寝てる事が一度でもあった？」
「あはは。確かにそりゃ無いわ」
屈託無く笑う。
ひいき目抜きで、黙っていればそこそこ可愛い部類には入る。
だけど・・・。

美喜子はどうも女性の感覚が無いようで・・・。
「それで?今日はなんだよ。もう夏休みの宿題は全部終えただろ?」
あれは地獄だった・・・。
だけど、そのおかげでまだ残り沢山ある夏休みをゆっくり遊ぶ事が出来る。
「いやー。実はね、うちの両親が旅行に行っちゃって・・・」
「え?美喜子も?僕の両親も置いて行っちゃったけど・・・」
まさか・・・。
「うん。たぶん一緒だと思うよ。あとは二人で仲良くやりなさいって・・・」
そう言って、美喜子は一枚のメモを出す。
うっ・・・。
そこには確かに・・・。
『お隣の健一君とラブラブするチャンスだから、存分に仲良くしなさい』
などと書かれていた。
・・・もしかしたら、家の1階にも似たようなメモが残ってるかもしれない・・・。
「このさいラブラブは置いといて、残りの夏休みをなんとか二人で過ごさないと・・・」
そうだった。
なんか、海外に行くとか言ってたな・・・。
帰るのは一週間後ぐらいとも言ってたような・・・。
一応お金は置いてあったから、なんとかなるかもしれないが・・・。
にしても、まさか隣の家族まで行ってたとは・・・。
これは・・・。
また不幸な出来事の前触れかもしれない・・・。

第1章　ピラミッド（後書き）

次回の更新は1月18日（月）予定です。

第1章　2話

僕も美喜子も寝間着のまま下へ降りる。
さて・・・何が出てくるか。
こういう場合、大抵最悪な状況が待っている。
これまでもそうだった。
だからこそ、僕は不幸だと思う。
テーブルの上に何か置いてある。
メモか・・・？
いや、別に何かある。
なんだ・・・？
『健一。おまえの為に新婚旅行を用意しておいた』
新婚旅行って・・・。
結婚もまだなのに、どうも両親は結婚してると思ってるらしい・・・。
ん・・・？
どうやら、飛行機のチケットらしい。
親も旅行に行ってるのに、わざわざ僕らの為に買うとは・・・。
どこから、そのお金を出したんだか・・・。
なになに・・・行き先は・・・。
「は・・・!?カイロ？」
美喜子が驚くのも無理は無い。
どう考えても、そこは新婚旅行先じゃないだろと。
いや、別に僕たち結婚してる訳じゃないんだけど。
でも、仮に結婚したと仮定をしてもそこはありえない。
・・・まったく、何を考えてんだか。
本当・・・どこからそんなお金が出たのか、疑問が残る。
僕の家も美喜子の家も、そんなにお金持ちじゃないはずなんだが・・・。

「ん～。どうする？これ」
確かに・・・どうするか・・・。
「キャンセルして、そのキャンセル料で遊んだ方がいいと思う」
それが賢明だし、エジプトのカイロに行くよりいいと思うが・・・。
「えー！？せっかく面白そうなのに・・・キャンセルするの！？」
これだ・・・。
美喜子は好奇心が旺盛だ。
普通の人ならば、よほど興味が無い限りカイロなんてまず行かない。
これがハワイだの台湾だのと言った、有名観光スポットならいざ知らず。
「行きましょうよ！そしてピラミッド見るの！！」
・・・絶対嘘だ。
見るだけで終わる訳が無い。
それは子供の頃から一緒だったから分かる。
まず間違い無く、そこへ行ったら中へ進入するのは目に見えている。
・・・だから行きたく無いんだ。
「よーし！決定！！」
そして・・・。
この場合、僕の意見は完全に無視される。
だから、僕は不幸なんだ・・・。

第1章　3話

「いや、ちょっと待って！妹の葉子はどうするんだ？」
確か彼女もどこかへと出かけてはいるが、ずっとって訳じゃない。
僕達まで旅行に行ったら、それこそ彼女は一人になってしまう。
「いいのよ。私たちも親と同じようにメモ残して行けばいいんだから」
まったく・・・。
こういう所は親そっくりだな。
こうして・・・。
かなり強引な取り決めだけど。
僕達は一緒にエジプトのカイロへと行く事になった。
そういえば・・・。
二人だけで海外に行くなんて初めてだな・・・。
そもそも二人だけでどこかへ行くという事が久しぶり。
「ねぇ。やっぱ薄着の方がいいよね？」
美喜子はすでにウキウキ気分だ。
「カイロだけならそれでいいけど、ピラミッドへ行きたいんだろ？
それなら長袖の服も持って行った方がいいよ」
「え！？なんで？」
「だって砂漠を行くんだろ？砂漠というのは想像以上に暑いけど、
その日光も鋭すぎて肌をさらしていたら火傷するんだよ」
だから、普通に観光気分で行ったらとんでもない事になる。
「へぇー。行く気ないのに詳しいのね」
「あのねぇ。これは当然の知識だけど・・・」
「いやー。私は知らなかった」
まったく・・・。
これだから僕は不幸なんだ。
そう。

これで美喜子を放っておければ、どんなに楽か。
でもそこはやはり幼い頃からずっと一緒だったから、どうにも見捨てる事は出来ない。
これはやはり・・・。
徹底的に面倒を見ないといけないって訳か・・・。
あと、専門知識を得ておかないと・・・。
どうせ美喜子の事だから、後先考えて無いと思う。
ただでさえ、美喜子はトラブルを呼ぶ。
だからこそ・・・。
万全の準備をしなくては。
なにせ、今度は海外。
しかもエジプトのカイロ。
何が起こるか想像も出来ない。
しかも・・・。
ピラミッドに行くとも言ってる。
・・・絶対、とんでも無い事になるに決まってる。
それが分かっても、巻き込まれる事を覚悟しないといけない訳か・・・。
だから、僕は不幸なんだ・・・。

第1章　4話

ついに来てしまった。
エジプトはカイロ。
実は海外に行くのは初めて。
それが、美喜子と二人きりとは・・・。
「ねぇねぇ！早速ピラミッドへ行こうよ」
あのねぇ・・・。
「まずは泊まる場所を確保するのが先だろ?荷物だってあるんだし・・・」
このまま直接行くつもりだったのか・・・。
「だって～。ピラミッドへ行きたくてワクワクしてんだもん」
こういう所はある意味、美喜子らしい。
だけどここは海外。
何が起こるか分からない。
とにかく、まずは宿泊先を確保しなくては。
こういう時の為に、色々調べて良かった。
日本人向けのホテルはすぐに見つかった。
やはり観光客が多いんだろう。
まだ午後3時くらいだけど、すでに6割は埋まってるらしい。
「それで・・・、シングルを2部屋・・・」
「何言ってんのよ。そんなのお金の無駄でしょ?ダブルでいいわよ」
おいおい・・・。
「何言ってるのか分かってるのか!?それって僕と美喜子が同じ部屋で寝泊まりするって事だよ?」
「うん」
即答した。
いや・・・。
たぶん、その意味を深くは分かっていないんだろう・・・。

そりゃあ・・・確かに昔からお互いを知ってる仲とはいえ、仮にも男と女が一緒に泊まるなんて・・・。
でも美喜子の言う通り、お金はだいぶ浮いた。
2泊3日の短い期間だけど、お金は節約するに限る。
それに、僕と美喜子じゃあ、万が一の事態も起きないか・・・。
それよりも、もっと深刻なのはこれからピラミッドへ行く事だ。
あの美喜子が、ただ見て帰るとは思えない。
中に入る事も当然予想される。
問題は。
このピラミッドへ行って無事に帰れるかどうかだ。
そりゃあ、ピラミッドは随分研究されて、ほぼ中身の全貌は明かされたと言っても過言じゃないけど。
それでも、今でも隠された場所があるという推測が出ている。
それほど、ピラミッドというのは謎が多い場所でもある。
そして・・・。
どうも、美喜子はそういうのを引き寄せる何かがある。
これまでも、廃墟と化した工場で秘密の紙幣製造機を見つけたり、自然の洞窟に入って行方不明となった人物の遺骨を見つけたりと、いくつも例があるぐらいだ。
そしてこういう場合、大抵僕が貧乏くじを引くはめになる。

第1章　4話（後書き）

次回更新は2月8日（月）予定です。

第1章　5話

「これがピラミッド・・・」
本当に来てしまった。
目の前に巨大なピラミッドがある。
僕達はあれから、まずラクダをレンタルした。
いくら街から近いとはいえ、砂漠を渡るのにラクダ無しなんて無理だ。
何せ僕達は普通の観光客だ。
砂漠を徒歩で渡ろうなんて、無謀もいい所だしね。
でも、美喜子がラクダに乗る事に興味を覚えたのが良かった。
ここまではいい。
「すっご〜〜〜〜い！！」
素直に感動してる。
確かに・・・。
僕も目の前の光景を見て、感動をしている。
これまで写真とか、テレビでしか見た事ないけど・・・。
実物は凄い。
まず大きい。
当たり前と言えば当たり前だけど、実物の大きさというのは想像以上だ・・・。
「ねぇねぇ！これって、何処から入るの！？」
・・・やっぱり。
当然と言えば、当然の展開だ。
「あっ！！あれかな・・・」
どうやら入り口を見つけたようだ。
まぁ、観光客用の入り口はあるだろうから。
それで満足してくれればいいが・・・。
僕も後を追う。

さすがに中も凄い・・・。
中は僕もあまり知らないんだけど。
古代の作った人という感じがする。
当たり前か。
「ふぇ～～」
美喜子はしきりに感心している。
「どう？本物のピラミッドは？」
「うん！やっぱり来て良かった！！」
満面の笑みを浮かべながら言う。
本当に喜んでるみたいだ。
僕としては、美喜子が喜んでくれるならいい事だ。
願わくば、このまま無事に帰れますように・・・。
「ん？ねぇ・・・。これってなんて書いてあるの？」
何か見つけたようだ・・・。
これは・・・。
古代文字だな。
「なんでこれを？」
そう。
他にもあちこちあるのに、何故これだけ興味を示したのか。
「うん・・・。何かね。呼んでる気がして」
・・・。
絶対何かある・・・。
読みたくない・・・。
「ねぇ。これ読める？」
うっ・・・。
ここへ来て・・・。
勉強して来た自分を恨む事になった・・・。

第1章　6話

そこにはそう書いてあった。
『この下を押す者。全ての希望を捨てよ』
・・・えっと。
「全ての希望を捨てよ！？」
美喜子も驚く。
それはそうだろう。
何せこの文章。
あの有名なダンテの「神曲」に出てくる言葉に似ている。
しかも地獄の門に書かれてある言葉という内容だったはず・・・。
それがここにもあるなんて・・・。
つまり。
これを押す事は地獄へと進む道だと思った方がいい。
「美喜子。これはやばすぎる。おとなしく違う所を見よう・・・」
僕がそう言ったのにもかかわらず。
美喜子はすでに手が伸びていた。
そして・・・。
そのまま押した。
「って・・・。何押してんだよ！！」
「え？いや～。言ったじゃない。呼ばれてる気がするって」
だからって・・・。
こんなとんでもない事が書かれてるのに・・・。
「え！？」
その次の瞬間。
僕達の床が無くなっていた。
そして・・・。
そのまま二人とも、落下して行った。
くっ・・・。

何かトラブルを起こすと思ったけど・・・。
こういう展開だとは・・・。
「うわっ！！」
しらばく落下すると・・・。
突然、広い空間が表れる。
そして・・・。
そのまま落下する。
「くっ！！」
衝撃はあるけど・・・。
なんとか・・・無事みたいだ。
「美喜子？」
僕は側に落ちた美喜子に声をかける。
「いつつ・・・。なんとか大丈夫よ」
良かった。
美喜子も無事か。
さて・・・。
これは困った事になった。

第1章　7話

とりあえず・・・。
外に出る所を探さないと・・・。
そんなに落下はしてないはずだから、たぶん出るのはそう難しくないかもしれない。
・・・出られる所があればの話だけど。
周りはたいまつがあり、明るいのでとても助かる。
「ん？何あれ・・・？」
美喜子がなにやら指さしてる。
あれ・・・？
そこには・・・。
そう。
部屋のちょうど隅の辺りに、本が落ちている。
なんだ・・・？
見ると・・・。
かなり古ぼけた本だ。
表紙に何か書いてある。
何だ・・・？
「トトの書!?」
まさか・・・。
トトと言えばエジプト神話において書記と学芸の守護者で、ヒエログリフ文字の発明者とも言われてる、まさに文芸の神の名前。
それが何故ここに・・・。
僕は思わずページをめくる。
「あれ？」
美喜子が疑問に思った。
それはそうだろう。
真っ白で何も書かれてない。

古い書物のため、色はだいぶ黄ばんではいるが・・・。
でもこの紙質はパピルスに間違いないだろうし・・・。
表紙の文字も、間違いなく古代エジプト文字なんだけど・・・。
なんで何も書いてないのだろうか・・・？
ん？
ようやく何か書いてあるページにたどり着いた。
「何・・・これ？」
２ページ見開きで、巨大な円が描いてあり。
その円の中には、なにやら奇妙な図形やら文字やらが書かれてある。
「なんかこれ・・・魔法陣みたい」
確かに・・・。
美喜子の例えが一番近いかもしれない。
でも、なんでここに・・・？
あれ・・・？
「何!?」
突然・・・。
その魔法陣が光った!!

第1章　7話（後書き）

次回更新は3月1日（月）予定です。

第1章　8話

な・・・なんだ?
光が消えた・・・。
別に・・・何か出現した訳でも、何か異変が起こった訳でも無い。
「あれ?」
ふと気づいた。
手に持っていたはずの本が無くなってる事に。
一体何処に!?
ゴゴゴゴ・・・。
突然部屋が揺れ始めた。
揺れてるとは言っても、そんなに激しくは無い。
「な・・・何!?」
美喜子も驚いている。
「ん・・・?あれ!!」
だけど、その美喜子が先に気づいた。
壁の一部がせり上がってる事に。
そして・・・。
揺れが収まると同時に、通路が表れた。
ここを行けって事か?
「どうやら・・・行くしか無いみたいね」
「おい。どう考えても罠に決まってる。もう少し調べて他の通路が無いか・・・」
だけど、僕の言葉を美喜子が遮る。
「んな事は分かってるわよ!でも・・・他の通路なんてあると思う?」
確かに・・・。
他は全部壁。
通路はおろか、扉も無い。

「つまり・・・罠を承知で行くしか無いって事よ」
そういう事か・・・。
はぁ～。
やはり・・・トラブルに巻き込まれたか・・・。
問題は・・・。
さっきの魔法陣だ。
トトの書に描いてあったあれは、もの凄い気になる。
そして・・・。
光りはしたけど、通路が出てくるだけで済んでるというのも気になる。
本当に異常は無いのか・・・？
「どうしたの？行くわよ」
「ああ・・・」
はたして何が待ってるのやら・・・。

第1章　8話（後書き）

次回更新は3月8日（月）予定です。

第1章　9話

長い通路が続く。
ただまっすぐに・・・。
それにしても・・・。
今にして思えば、この通路も落下した時の部屋も公開されている見取り図には無い部分だ。
つまり・・・。
まったくの未知の部分。
それだけに、不安が募る。
第一この通路はまっすぐに見えるけど、上がってるのか下がってるのかも分からない。
人間の感覚というのは、かなり鈍いもので。
微妙な角度だとこういう場合認識されない。
だから、万が一この通路が下がっていたとしても・・・。
それを知る術は無い。
それが怖い。
だけど・・・。
美喜子はそんな事おかまいなしに、平気で歩いている。
凄い度胸だ・・・。
まぁ美喜子の場合、何の考えも無いとは思うけど・・・。
ドン!!
突然、もの凄い音が聞こえた。
ちょっと揺れも感じた。
そう・・・。
もの凄い重い物が落ちたような感じだ。
なんだ・・・？
ゴゴゴゴゴ・・・。
何か・・・転がって来ている音が聞こえる。

しかも・・・。
だんだん音が大きくなって行く・・・。
「な・・・なんかやばそうだな」
こういう場合、大抵近づいて来る物なんて危険な物に決まってる。
なっ・・・!!
それが見えて来た!!
あれは・・・。
巨大な丸い岩だ!!
それが後ろからこっちに向かって来ている!!
「逃げろ!!」
僕達は走る!!
待てよ・・・。
丸い物がこっちに転がるって事は・・・。
やはり僕の心配した通り・・・。
この道は下がってるんだ!!
そうじゃなきゃ、こんな長い距離をいつまでも転がるなんてありえない。
くっ・・・。
下がると分かっていて、進まなきゃならないのか!!

第1章　9話（後書き）

次回更新は3月15日（月）予定です。

第1章　10話

ドン!!
何やら・・・広い部屋に出た。
後ろでは、丸い玉がつっかえて止まってる。
これで、戻る事は無理になったな・・・。
「ん・・・?何・・・ここ?」
改めてゆっくりと部屋を見渡す。
確かに・・・。
美喜子が驚くのも無理は無い。
この部屋には・・・。
沢山の棺が置いてある。
王様のために一緒にミイラになった人達だろうか・・・?
確か、そういう人達がいたって伝記があったはずだから。
つまり、ここはそういう人達が集まってる所なんだろう。
「ちょ・・・ちょっと・・・。冗談でしょ」
なんだ・・・?
突然・・・どうしたんだ?美喜子・・・。
目線の先を見る。
なっ・・・!!
なんだ・・・あれ・・・。
ミイラが・・・動いている・・・。
馬鹿な・・・。
それも・・・1体だけじゃない。
数体・・・次々と動いている。
こ・・・こんな・・・非科学的な事が起きてるなんて・・・。
それが・・・こっちに近づいて来る!!
くっ・・・。
どうすればいいんだ・・・?

「来るんじゃ・・・無いわよ!!」
美喜子が素手で突きを放つ。
そう。
美喜子は幼い頃から空手を習っている。
だからこそ、こういう時に無意識にでも体が動いたのだろう。
ここまではいい。
だけど・・・。
そのミイラが勢いよく壁にまで吹っ飛んだ!!
どういう事だ・・・?
いくらなんでも、こんなに威力があるなんて・・・。

第1章　11話

一通り美喜子は暴れた。
「ふぅ・・・」
一息つく。
「大丈夫か・・・？美喜子」
僕は駆け寄る。
「うん。特に何も・・・」
確かに・・・今の所何もなさそうだけど・・・。
「なんだ・・・？今の威力・・・」
今まで何度も美喜子の空手は見た事あるけど・・・。
スピードも威力も全然違う。
「分かんない。なんか精神を集中したら、突然・・・」
それでも、いきなり使いこなしてる美喜子も凄いと思うけど・・・。
「このピラミッドの力なんだろうか」
良くピラミッドパワーって言葉を聞くけど。
ここはそのピラミッドの中だから、ありえるかも。
「それか・・・あの魔法陣のせいとか」
あっ・・・！！
そうか。
美喜子の方が正しいかもしれない。
あの時は何も体に変化は無かったけど。
確実に何か変化はあったって事か・・・。
美喜子は何回も突きを放ってる。
「うん。分かって来た。どうも精神を集中すると力が発揮されるみたい」
確かに・・・。
普通のスピードと、目にも止まらないぐらいのスピードとがある。
「副作用とかはあるのかい？」

「う～ん・・・。一度の使用ではそんなに長い時間使えない事かな？数十秒くらいね。ただ何回も使えるみたい」
見てる限りでも、他に副作用の影響は無いみたいだ。
良かった・・・。
ん・・・？
美喜子が僕の右手を握って来た。
「さて！先に行くわよ」
珍しいな・・・子供の頃以来かな？
こういう時・・・確か、美喜子は不安を抱えてる時があったはず。
普段は男みたいで、誰かを頼りにするって事は無いけど・・・。
やはり・・・未知なる力に不安を抱いてるんだろうか。

第1章　11話（後書き）

次回更新は3月29日（月）予定です。
最近更新が遅れてすいません。

第1章　12話

さて・・・困ったぞ。
とうとう行き止まりにたどり着いた。
考え無しに奥へ奥へと来たのはいいが・・・。
もうこれ以上進む事は出来ない。
元に戻るにも、またあのミイラだらけの部屋に戻るだけ。
つまり、どうにもならなくなってしまった。
美喜子もあちこち見てはいるが・・・。
いつもの勘も働いて無いみたいだし。
こうなると、壁面に書いてある文字だけが頼りだな・・・。
だけどここに書いてある事は、古代の文献という感じでいわゆる昔話のようなものだ。
脱出する為に必要な事は書いていない。
困ったな・・・。
「どうしよう・・・健一」
不安そうな表情で美喜子が聞いて来る。
普段からはまず出ない表情だけど・・・。
それを喜ぶような状況では無い。
僕がなんとかしないと・・・。
何か・・・何か無いか・・・？
美喜子が僕を頼るなんてまず無い事なんだから。
ん・・・？
あった!!
何々・・・。
『ここにドクロが眠る』
・・・。
修正、とんでもない文章を見つけてしまった。
またドクロなんて、不気味な文章だな・・・。

でも・・・。
ドクロなんて何処に・・・？
手持ちのライトでは、この部屋も良く分かって無い。
もしかしたら、何かあるのかもしれない。
もうちょっと明るかったら何か分かるのに・・・。
でも、こればかりはどうしようも無いな。
「どうしたの？」
「あぁ・・。どうやらこの部屋に何か・・・あるみたいだ」
ドクロとは言わなかった。
あまり先入観を持たせたく無かったというのがある。
美喜子は単純だから、あまり固定概念を与えると見逃す事もある。
だから、わざと抽象的に言った。
その方が期待に応えてくれるからだ。
「本当!?さすが健一ね」

第1章　12話（後書き）

次回は4月5日（月）予定です。

第1章　13話

部屋の隅々を調べる事にした。
美喜子も懐中電灯を持って調べている。
さて・・・ドクロとはいったい何だろう。
普通のドクロの事か・・・？
いや、それは無さそうだ。
良く見たらあちこち骸骨化した死体が見える。
・・・もしかしたら、ここへと迷い込んだ人達なんだろう。
僕達もこうなってしまうのだろうか。
いや！
何か脱出する手段があるはずだ。
その為にドクロを見つけなければ・・・。
「ん？これ・・・何かな」
美喜子が何かを発見したみたいだ。
やはり、期待通りか？
僕はそこへと駆け寄る。
これは・・・。
水晶のドクロ！？
手に取って見る。
細かい分析は出来ないけど・・・。
ライトを当てて見ても、まず本物の水晶と見て間違い無いだろう。
まさか・・・。
オーパーツに出会えるとは。
トトの書といい、このピラミッドには本当に謎が多い。
ピラミッド自体がオーパーツって聞くけど、確かにそうかもしれない。
「ちょっと・・・何あれ！？」
なんだ・・・？

うわっ！！
骸骨が動いている！！
ミイラも動いたけど・・・。
また非現実な状況。
「このっ！！」
美喜子が恐れを知らずに攻撃をする。
だが・・・。
「ちょっと！！健一・・・これ・・・復活して来る！！」
そうだ。
ミイラの時は倒せていたのに・・・。
この骸骨達はバラバラになっても、また元に戻ってしまう。
それが何体も近寄って来る！！
これに反応しているのか！？

第1章　14話

「ちょっと!!どうしたらいいの!?」
倒しても倒しても復活する骸骨達。
こうなってしまうと、美喜子もどうにもならない。
かと言って僕もどうする事も出来ない。
こんな非科学的な存在、信じられないくらい。
どんどん、こっちに近づいて来ている。
はっ!
もしかして・・・この水晶のドクロのせいか?
「これ・・・捨てた方がいいかな?」
「正気?どのみちそれが無いと私達困るじゃない」
確かにそうかもしれない。
まだ、このドクロを詳しく調べてはいないけれど。
たぶんこれに何か秘密があるに違いない。
僕も聞いた話だけど・・・。
水晶のドクロはオーパーツの中では有名な話だ。
オーパーツというのも、かなり非科学的な存在ではあるけれど・・・。

ここにこうして存在してる以上、それは否定出来ない。
だから、これは大切に持っていないと駄目だ。
でも・・・どうすれば・・・。
このまま・・・ここで死んじゃうのか!?
くっ・・・!!
もう・・・駄目か!?
「『エンジェルカッター!』」
え・・・?
誰だ!?
やや幼い女の子の声みたいだけど・・・。

しかも・・・。
どこからともなく、光の刃が放たれた！
それが・・・骸骨達に当たる。
「見て！骸骨が・・・！！」
そう。
崩れ落ちて行く。
当たった骸骨は、二度と動かない。
なんだ・・・？
とてつもなく凄い攻撃だけど・・・。
一体誰が？
辺りを見渡すけど、誰もいない・・・。
「あっ！健一。頭の上！！」
え！？
いた！
光り輝く、小さな女の子・・・いや、サイズが小さすぎる。
それこそ、てのひらぐらいの大きさの子が宙に浮いている。
なんだ！？

第1章　15話

動く骸骨達は全部崩れてしまった。
なんだ!?この子は・・・。
「君は・・・？」
「私?私はウィル・オー・ウイスプ。光の精霊よ」
精霊?
なんだ・・・それは。
また非科学的な存在が出て来てしまった気が・・・。
「何にしても助かったわ。ありがとう」
そうだ。
美喜子の言う通り。
助かった事は確かだ。
「あら。私に礼を言うのは違うわ」
え・・・？
「そこの彼氏に言った方がいいわ。何せ私は彼の力で現れたんだから」
え!?
「ぼ・・・僕!?」
まさか・・・。
「どうも分かってないみたいだけど。彼は私達、精霊を操る力なんだから」
僕にも・・・力が!?
「それじゃ」
そういうと、消えてしまった。
そりゃあ・・・美喜子だけ不思議な力があるってのは無いとは思っていたけど。
「どうしたの?悩んじゃって。それで助かったんだから良かったじゃない」

それは確かにそうなんだけど・・・。
なんで、よりによって非科学的な存在の力なんだ。
美喜子みたいに、パワーアップみたいのだったらまだ納得出来るのに。
「そうそう。やっと安全になったんだから、そのドクロをきちんと調べてみたら？」
あっ、そうだ。
僕達はこれのせいで危険になったんだった。
水晶のドクロ。
僕も話しに聞いた事がある程度だけど・・・。
あちこち調べてみるか・・・。
ん・・・？
このドクロ・・・。
目のくぼみの所から見てみると、何か・・・映像みたいのが見える。
いや。
数字だ。
なんだ・・・？
５１－１０－４３．９、１－４９－６と書いてある。
・・・まったく意味が分からないな・・・。

第1章　15話（後書き）

次回更新は4月26日（月）予定です。

第1章　16話

さて・・・困ったな。
このドクロが解決してくれると思ったのに。
「ねぇ。健一。それ私にも見せてくれる？」
そうだな・・・。
美喜子なら、また違う所を見つけてくれるかもしれないしな。
僕はドクロを渡す。
あれ？
なんか足下が冷たい・・・？
「うげっ！あれ！水が入ってくる！！」
美喜子が指を指す。
なんて事だ。
唯一の出入り口だった所から水が入り込んで来る。
このままだとこの部屋が水で一杯になる。
「どうすんの！？」
「心配しないで、とりあえず美喜子はドクロに集中して」
そう。
僕には精霊があるんだ。
水には水で対抗。
「水の精霊よ！」
これで僕たちは濡れずに済む。
美喜子はそれに安心し、あちこち調べている。
「あれ・・・？」
ドクロを下からのぞいた時に、何かを発見したみたいだ。
「なんだろう・・・。何かが見えて来ている」
「何かが・・・？」
何だろう・・・。
「ん・・・？何か・・・風景みたい」

風景!?
なんだ・・・それは・・・。
「あれ?これ・・・何処かで見た事あるような・・・」
一体・・・。
美喜子には何が見えてるんだ!?
「ちょっと・・・僕にも見せてくれないか?」
僕は美喜子の側に寄り、のぞき込む。
「待って。何か・・・これ・・・」
なんだ・・・?
「あっ!これ・・・分かった!!私達が予約したホテルの窓から見た外の風景!!」
なんだって!?
なんでそんなのが?
・・・え!?
「え!?」
次の瞬間。
僕達はホテルの部屋の一室にいた。
そんな馬鹿な!?
さっきまで・・・ピラミッドの中にいたって言うのに・・・。
だけど・・・夢では無い。
だって・・・美喜子の手には水晶のドクロがある。
つまり・・・。
ピラミッドの中にいたのは間違い無い。
だけど・・・どういう事だ!?
まさか・・・。
この水晶のドクロの力なのか!?

第2章　ストーンヘンジ

私の名前は佐藤美喜子。
２つ下の妹の葉子を含む４人家族。
ついこの前まで普通の女の子をしていた。
そもそもが、私の思いつきでピラミッドへ行ってみたかっただけだったのに。
まさか・・・こんな大冒険になってしまうなんて。
これまでも、私のせいで色んな出来事が起きたけど・・・。
命の危機になるなんて、もちろん初めての事。
こうして無事に戻ってこれたから良かったものの・・・。
一歩間違っていたら、死んでいてもおかしくなかった。
まぁ、これで無事に戻って来たのはいい。
だけど・・・。
とても困った事が起きてしまった。
それは・・・。
「美喜子。起きてるか？」
隣の健一が声をかけてくる。
「え！？あっ・・・うん。起きてる起きてる！」
慌てて答える。
「今日は僕の部屋に来ないから、大丈夫かと思ったんだけど・・・」
「あっ・・・大丈夫、大丈夫よ。それよりもせっかく無事に帰って来れたんだからゆっくりしましょうよ」
とりあえず、今は顔も見れない。
そう・・・。
困った事とは・・・。
健一の事だった。
非常にまずい・・・。
今までは単なる兄弟くらいしか思って無かったのに。

あの時・・・。
ピラミッドの中で私がもう駄目だと思った時・・・。
健一がとても頼もしく見えた。
そして・・・。
不覚にも、心ときめいてしまった。
そう。
私は、健一の事を好きになってしまった。
非常にまずい・・・。
とりあえず・・・この問題はどうにもならない。
なんせ、好きになってしまったから。
だから、もう諦めて。
もう一つの問題を解決しなきゃ。
そう・・・。
ピラミッドから持って来た水晶のドクロ。
これに書いてある数字の意味は、吉矢が解決するとして。
とりあえず・・・あそこに持って行かなきゃ。

第2章　2話

来てしまった。
本当はあんまりここには来たく無かった。
別に、嫌って訳じゃなくて。
本来ならこういう問題は自分たちで解決すべきであり。
むやみに友達の力は使いたく無かったけど。
こういう事態になってしまったからには仕方ない。
私はお店の扉を開ける。
「いらっしゃ・・・。あら、美喜子さん」
「どうも、理恵子」
彼女は林道理恵子。
このリサイクルショップに勤めている、凄腕の鑑定人だ。
普段、学校で見てる時は美人で博学な部分を見せてはいるけど。
あまり古くさい物には縁が無さそうには見える。
だけど結構古代知識にも長け、泥のついた壺も平気で触れたりする。
「初めてですね、この店に来るのは」
「そうね。遊びに来る時も家側からしか来た事無かったもの」
ハッキリ言って、私はそういうのには無縁だったものね。
だけど・・・。
「それで、わざわざこっちに来たのはどういう事ですか？」
「実は・・・見て欲しいのがあるの。別に売りたいとかじゃなくて」
彼女はそれこそ触っただけでも、その品物の事が分かるとも言われている。
だから、ここは知る人はとてもつもなく重宝する場所かもしれない。
私はバックの中から、水晶のドクロを取り出す。
「これは、水晶のドクロ？」
「本物かどうかは知らないけどね」
そう。

まだこれをきちんと鑑定した事は無い。
それは、万が一本物だった時に困る。
何せこれは、私達が命がけで見つけた物。
一体何の意味があってあそこにあったのか。
それが知りたい。
健一が見つけた数字にも何か意味があるとは思うんだけど。
この存在自体に何か意味があるのかもしれない。
それほど。
オーパーツと言われる物には謎が多い。
そう健一が言っていた。
「待って」
理恵子は薄手の手袋をすると、そっと触る。
「!?これは!!どこで見つけたんですか?」
「え!?ピラミッド」
私は素直に答える。
「ピラミッド?」
「えっと何だっけ・・・ギサのピラミッド?」
「ギザのピラミッドですね」
「そうそう!それ!そこで見つけたの」
うーん、やっぱきちんと覚えて無かったなぁ。
「美喜子さん。これは正真正銘、本物ですわ」

第2章　3話

まさかとは思って無かった。
あんなとんでもない目に遭って、偽物だなんて訳がないとは思っていた。
それにしても・・・触っただけで分かるなんてどういうことなの？
「はっ！すいません。つい興奮して」
あらら。
とても珍しいのを見せてもらったわ。
彼女はあまり熱中するという場面を見せないタイプだと思ってたけど。
「これはまさしく、ヘッジスのドクロに匹敵するほどの物」
「ん・・・？何それ？」
初めて聞く名前だわ。
「オーパーツの中でも特に有名な品物です。水晶が持つ自然軸に反する形で切り出されて形成されているという、とても珍しい品物」
「へ・・・？どう珍しいの？？？」
サッパリ分からない。
「水晶というのは、自然軸に沿って加工しないと壊れてしまうんですよ。ですから自然軸に反する加工というのは、現代の技術でも不可能なんですよ」
へー・・・。
そんな訳の分からない品物なのね。
「これは全部で１３個あると言われてました、まだ本物は１個しか出てなかったのに」
１３個！？
それが本当だとすると・・・。
今が２個・・・つまり、まだこれと同じ物が１１個存在する事になる。

まさか・・・。
例の数字って・・・次の水晶のドクロへの道のり!?
「まさか、本物を見れるとは思って無かったですわ」
まぁ・・・その話が本当なら、確かに本物なんてそうそう見れるもんじゃないし・・・。
ってあれ?
そうだわ。
まだ理恵子はきちんと観てない。
それこそちょっと見て、触っただけ。
まさか・・・。
「ねぇ・・・理恵子。もしかして・・・不思議な力が使えたりするの?」
私は気になる事を聞いてみた。
それは。
今の私も不思議な力が使えるから。
以前の私だったら、こういう事を考えもしなかったでしょうね。
「え!?その・・・」
「心配しないで。私も不思議な力を使えるの。そのピラミッドの中での出来事でね」
思えば・・・。
あの時・・・何か妙に引きつけられる文字を見つけた事から始まった、とても危険すぎる冒険。
その中で見つけた、トトの書。
あれの力。
もしかしたら・・・。
理恵子も似たような物の力をもらったのかしら?

第2章　4話

聞いたら、やっぱり理恵子も不思議な力を使えるらしい。
私と同じように、魔法陣の力で。
ただ、理恵子はそれでも後悔はしてないみたいだけど。
「でも、私がこのお店で働いているのには訳があるんですよ」
「訳？」
そう言えば学校では仲良くしてるけど、あんまり聞かなかった事だものね。
「妹です」
「妹？あぁ・・・葛葉ちゃんね」
まだ１２歳の女の子がいたわね。
「葛葉もね。その魔法陣の力に取り込まれて」
なるほど。
「まぁ、私達も突然、力が使えるようになって戸惑ってる所だけどね。だからその水晶のドクロが何か解決への道のりになるんじゃないかと、勝手に思ってるんだけど」
「これはあくまで噂のレベルなのですが」
そう前置きをする。
理恵子の話はこうだ。
この水晶のドクロが１３個集まった時。
その時に真の地球の姿が映ると言われている。
「これまで１３個集まった事も無いので、単なるデマなんでしょうけど」
私からしてみたら、１３個あるって話も本当かどうか。
「そうそう。妹と言えば、美喜子さんの妹さんは？」
「葉子？それが・・・今回の旅行には着いて行かなかったけど、私達が帰ったらなんかどっか行ったらしく家にはいないわよ」
私達が旅行に行ってる間、どこに行ったのかしら。

「それで、また次を求める為に旅を？」
「旅というか、冒険になるかもね。何せこのドクロを求めるのにも、とんでもない目に遭ってんだから」
次の場所がまだ何処か知らないけど。
きっと、また命がけの冒険になるんじゃないかと思ってる。
「それでは、私も着いて来た方が」
「いや！理恵子はここで待っててて！」
私はキッパリと断った。
「え？でも、友達が危険な目になるって知ってて、黙って待つなんて」
「いいから！また何か見つけたらここに来るから」
確かに理恵子が来るのは、心配だわ。
まず彼女は勉強家ではあるけど、運動神経はある方では無い。
だから、まず間違いなく危険な目にあう。
それもある。
だけど。
私は違う心配もしている。
それは。
理恵子はとても綺麗で美人な事。
うちの学校の中でもトップクラスに入るんじゃないかって勢いの。
だから・・・。
正直、健一には合わせたくない。
自分でも分かってる・・・これが嫉妬だって事ぐらいは。
「とにかく！待っててて」

第2章　4話（後書き）

次回更新は5月31日（月）予定です。

第2章　5話

家に帰ると健一が待っていた。
「あの数字の意味が分かった。どうもあれは座標みたいだ」
「座標？」
「そう。地球上の場所を示す数字なんだ。つまり５１－１０－４３，９というのは北緯の事であり、１－４９－６は西経の事」
えっと。
「つまり、何処の事？」
「ストーンヘンジだ」
ストーンヘンジ？
「ピラミッドのような、有名な古代から存在する遺産の一つなんだ」
という事は。
「やはり、そこにも水晶のドクロが？」
「だろうね。ピラミッドからも出てきたって事は、あり得る。ただ、問題は、ストーンヘンジは建物じゃないって事だ」
それって。
「ストーンヘンジは直立した巨大な岩が円形状に囲まれているような所なんだ。まぁ、土の中にあるってなら話も分かるけど」
う～ん。
「何にしても、行ってみなきゃ分からないって事ね」
ここで悩んでも仕方無い。
私達が見つけた水晶のドクロがそこを示しているというのなら。
そこに行くしか無い。
一体何の意味があるのかも分からないけど。
行くしか選択肢が無い。
「でも、問題が一つある。旅費だ。僕たちにはお金が無い」
「あっ、それなら大丈夫よ」
私は自信満々に言う。

そう。
飛行機代はなんとかなる。
「大丈夫？」
「えぇ。ほら、ピラミッドの時に瞬間移動したでしょ？あれ、どうやら私の力らしいの」
「え！？」
健一が驚く。
そりゃあ、私も帰ってから分かった事。
あの時、頭の中に映像が出てきて気づいたら場所が変わっていたけれど。
それが、私の力。
瞬間移動。
ピラミッドの中で発見した、力や素早さが上がる能力と同じように私の能力。
どうやら。
調べた結果、1日3回しか使えない代わりにかなり融通が利く。
触れてさえいれば、何でも持っていける。
しかも、一度も行った事も無い所にも行く事が出来る。
またその逆で、物を私の所へ持って来る事も出来る。
ただどうも人物は無理みたい。
って、これはその辺の動物で試したんだけど。
だから、生き物類を持って行く事は無理。
でも逆に触れてさえいれば、どんな物でも生き物でも連れて行く事は出来る。
「なるほど、かなり便利だね」
「そうね。だから、そのストーンヘンジへはすぐに行く事は出来るわ」
「しかし不思議な事があるな」
え？
「おまえがそういう事を詳しく調べるとはな。どういう事だ？」

しまった！
理恵子に調べてもらったなんて言えない。
彼女の事は健一には知られたくない。
「ほら。まだ冒険は続くんだから、調べるのは当然でしょ？」
「それはそうだが」
「ほらほら。そんな疑問は後にして、さっさと行きましょう！」
「分かった。準備出来次第行こう」

第2章　6話

いよいよストーンヘンジに着いちゃった。
こうして見ると、瞬間移動ってかなり便利ね。
にしても。
健一から聞いてたけど。
本当に、石柱が並んでるだけね。
本当にここに次の水晶のドクロがあるのかしら？
「ピラミッドが不思議な場所ってのはなんとなく分かるわよ。あんなに巨大なのを作れるって凄い事だもの。でもここはどうなの？」
はっきり言って、単に石柱が立ってるだけにしか見えない。
「うん。それも調べてみたんだけど」
ふむ。
健一の説明によると。
これは夏至・冬至・春分・秋分の４つの季節の変わり目の日の出と日の入りを正確に示しているらしい。
つまり。
そこを計算して、意図的に置いたとしか説明出来ないらしい。
「ふーん。なんか適当に置いてるようにしか見えないけど」
私にはサッパリ分からないわ。
「僕も実際に計算したけど、誤差はほとんど無いから、この説はかなり有力だろうね」
「なるほど。ここもピラミッド同様、謎の場所って所ね」
そうなると。
何かあるはずだわ。
ピラミッドの時のような。
それを調べてみましょう。
とは言っても。
本当に普通の石っぽいけど。

なんか特別なので出来てるのかしら？
まぁ、その辺りは健一に聞いてみないと分からないけど。
だから、ピラミッドの時のように古代文字が書いてある訳でもない。
いえ、模様すら無い感じ。
見た目、本当に普通の石。
とりあえずは、ぐるっと回りながら見てるけど。
今の所、なーんにも引っかかるもの無し。
おっかしいなぁ。
ピラミッドの時は、妙に呼ばれた感覚あったんだけど。
ここでは一切無し。
私の勘が鈍ったのか。
それとも、ここじゃないのか。
だいぶ日が沈んで来たわね。
「ふぅ、今日は一旦ここまでにしておこう。また明日調べて・・・」

第2章　7話

「ふぅ、今日は一旦ここまでにしておこう。また明日調べて」
そう健一が止めようとしたけれど。
「待って！もうちょいだけ」
せっかくここまで来てるのだから、何か。
何か見つけないと。
「気持ちは分かるけど。もう日が沈んで暗くなるし」
ううう。
健一の役に立ちたかったのになぁ。
仕方ないわね。
「ん？」
日がちょうど半分まで沈んだ時だった。
ストーンヘンジの石がうっすらと光始めた。
「え！？」
どういう事？
これ、普通の石よね？
「なっ！？なんだ、あれは！！」
健一が太陽の方向を指さす。
え？
別に、普通に沈んでいくけど。
「どういう事？」
「ストーンヘンジの説明の時に言ってたと思うけど、このストーンヘンジは夏至・冬至・春分・秋分の太陽の日の入り、出を示しているって」
「うん。それは聞いたけど」
「その、ちょうど夏至の部分から沈んで行こうとしてるんだ！！」
へ？？？
「ちょ、ちょっと待ってよ。今は8月の中旬、夏至なんてとっくに

過ぎてるはずじゃない！？」
そう。
ありえない。
「だけど今、そのあり得ない現象を見ているんだ」
まさか。
ピラミッドの時も、あり得ない現象を見ていたけど。
ここでも、同じような事が起きてるなんて・・・。
と言う事は。
やはりここにも水晶のドクロが！？
なら。
やはり、あの水晶のドクロは次を示していた事になる。
え！？
どんどん明かりが増して来る！？

第2章　8話

それはとても信じられない光景。
ストーンヘンジから放たれた光は、やがて一方向へと向けられていた。
つまり。
この方向へ行けって事ね。
「さぁて、何が待ってるのやら」
「にしても、またもや非科学的な光景を」
ふふっ。
「もういい加減諦めたら？この冒険を続けたいなら」
そう。
とても不思議で、説明の出来ない事が多すぎる。
でも、それこそが今の私達の道。
この不思議な現象をありのまま受け入れるしかない。
だいいち、私達の力だって科学じゃ説明出来ないし。
「美喜子は相変わらず前向きだね」
「それが長所ですから」
難しい事を考えるのは苦手だしね。
私達は光の示す方向へと歩く。
これは、どこまで続いてるのかしら・・・？
辺りも光に包まれているから、一体何処にいるのかも分からない。
「え！？」
急に光りが消えた。
なっ何！？
私達は立ち止まり、辺りを見渡す。
え？
ここは！？
「なんだ！？街？」

そう。
ビルが立ち並ぶ、都会という感じの場所。
だけど。
人が一人も見えない。
明かりも点いて無い。
でも、廃墟って訳でも無い。
だって。
道路は綺麗になってるし。
建物も壊れて無い。
「一体、これは？」
全然、見当も付かないわ。

第2章　9話

無人の街。
ここに水晶のドクロがあるのかしら？
まるっきり不釣り合いな感じ。
それにしても・・・私達以外には物音一つ無いわね。
バサッ！バサッ！
いや。
とてつもなく大きな鳥のような生き物が近づいて来る。
「とにかく、隠れよう」
私達は建物の陰に隠れる。
そこにいたのは。
とてつもなく大きな鳥、いや正確には女性の体があって手の部分が羽になってる。
そんな生き物。
何あれ！？
かなりでかい。
2メートルぐらい？
それが私達に気づかずに通り過ぎて行った。
「な、なんなのあれ？」
「そんなの僕に言われても困る」
さすがの健一も知らないか。
「ここで問題が二つになったか」
「二つ？」
どういう事？
「一つ目は、当然この街で何をするかだ。ストーンヘンジから飛ばされたという事は、何かをすれば水晶のドクロが手に入るとみて間違いないが」
確かに。

私達の目的は水晶のドクロ。
それは、まず間違いなくこの街の何処かにあるでしょうね。
「二つ目が今のやつだ。つまり、あいつと戦う必要があるかどうかだ。僕としては戦わないに越した事は無いが」
かなり大きい割には、空を飛行しているスピードは速かった。
そうなると、戦うのは難しいわね。
にしても。
ピラミッドの時とは違って、分からない事だらけね。
「よし！まずはこの街を探索してみましょ。ここで悩んでいても答えは出ないし」
「そうだね。ただし一緒に行動するべきだ。さっきみたいのもいるしね」
ふむ。
まぁ、私だったら一人でもなんとかなるけど。
一緒か。
って、何を急に意識してんのよ！

第2章　10話

あちこち歩き回っていたら、妙な建物を見つけた。
何なのかしら？
「これ、何かの研究所みたいだ」
へー。
そういうのが分かるって、やはり科学系が好きなだけあるわね。
私にはさっぱりだわ。
健一は喜々として入る。
なんか。
私以上に脳天気ね。
健一矢の方がよっぽど現状を分かってると思ってたけど。
仕方無いので、私も後を追う。
ふむ。
これが研究所って所なのかしら。
私は健一を見つける。
「どう？」
何やら部屋の一室で書類らしきのを見てるみたい。
「うん。どうやら、あのモンスターの事らしい」
「え？って事はここで作られたって事？」
「どうもそうらしい」
って事は。
あれはよくあるモンスターのように元々ああいう形の生き物なんかじゃなく。
作られた生き物って事なのね。
「どうやら人と鳥を遺伝子操作して作られてるらしい。コードネームは”ハーピー”だ」
「はーぴー？」
また聞いた事の無い名前。

「その昔いたとされている伝説の生き物だよ。日本で言う妖怪のたぐいみたいなもの」
あぁ、そう言われると分かるわ。
つまりそれを人工的に作り上げちゃった訳ね。
「あれ?ちょっと待って。あれが作られたって事は、本来ここで管理してないと駄目なんじゃないの?」
なんで外で放置?
「もちろん最初の頃はそうだった。けど」
「けど?」
「計算外の事が起きた。天候による停電だ」
へ?
「ちょっと待って。普通こういう所って停電が起きてもいいように対策してない?」
病院とかでも突然の停電でも大丈夫なようにしてあるって聞いた事あるし。
不測の事態に備える必要はあるものね。
「ところがだ。実はその天候ってのがやっかいだったんだ」
どういう事?
「聞いた事無いかな?ノアの箱船って話を」
「そりゃあ、有名な話だから私でも知ってるけど」
「つまり、大洪水が起きたんだ。いくら頑丈に作っていようが何週間も持つ訳が無い」
え!?
「ちょっと待ってよ!!まさか」
「そう。この町は、いやこの世界はノアの箱船の時のような大洪水の被害にあったんだ。いくらなんでもそれは想定外だろ?」
まさか。
そんな事が現実に起きてるなんて・・・。
「あっ!だからこの町は外があんなに綺麗なのね!?」
「そういう事。ゴミは全部流されていったみたいだね」

第2章　11話

どうもピラミッドの時といい、私達は不思議な事に巻き込まれてる気がする。
まさか、あんな神話みたいな話が実際にあったなんて。
「あった!どうやらあのハーピーは元のＤＮＡの提供者の影響で、宝石とか貴金属とかが好きみたいだね」
「それが探していた事？」
「ああ。分からないかい？僕達が探しているのは水晶のドクロ。あれだって”宝石”と言えると思うけど」
あっ！
そうだわ。
確かに水晶は高価な宝石の類には違い無いわ。
って事は。
「あのハーピーの巣に、水晶のドクロがある可能性が高い。人がまるっきりいなくなったこの世界では、他に管理してる生物はいなさそうだしね」
ピラミッドの骸骨といい。
どうも水晶のドクロは化け物が守ってるみたいね。
「そうなったら。まずは巣を探さないと」
巣ねぇ。
「どこかの部屋を利用してんのかしら？」
「いや。あのハーピーはだいぶ鳥のＤＮＡの影響を受けてるから、人の思考能力として考えてたら駄目だ。鳥として考えないと」
鳥ねぇ。
「って事は、何処か木の上？」
でもそんなのは何処にも無かった。
当然、洪水で木も流されちゃったって所ね。
人間の作り出した、この無数にある建物だけが残ってる。

「洪水で人も物も全て流された。それなのにあのハーピーだけはまだ生きているって事を考えると」
そうなると。
ずっと飛行するのは無理だから。
「もしかして！一番高いビルの屋上！？」
「そういう事。人間じゃなくても生物だったらまず高い所へ本能的に逃げるはずだ」
なるほど。
皮肉にも、この高いビルがハーピーを生かしてしまってるのね。
いくつも高いビルが立ち並んでるけど。
私達は研究所を出る。
この中で一番高いビルねぇ。
「あった！あれだ」
あれは！？
「ビル、じゃなかったけど。間違いなくこの中で一番高い建物には間違い無いね」
それは。
東京タワーやエッフェル塔のような形をした建物だった。
まさか。
この形をここで見る事になるなんて。
「どうやら、考える事は二人一緒って所らしいな。ああいう塔はだいたい電波を発信するためにも使われる。そうなるとなるべく遮断されないように、どの建物よりも高く建てる」
そして。
健一の推理通り。
その一番上に、何か動くものが見えた。
あれは、まずハーピーと見て間違いないわね。

第2章　11話（後書き）

次回更新は7月19日（月）予定です。

第2章　12話

私達は慎重に登る。
何せここは階段。
思いっきり外から丸見え。
当然エレベーターはあるけど、電源なんてある訳が無い。
だからこうして普通に登るしか無い。
というよりも自動扉も閉まってるから中に入れないだけだけど。
頂上は絶望的に遠い。
でもここは歩いて登るしか無い。
本当は私の瞬間移動を使ってもいいんだけど。
問題が一つ。
そう。
私の瞬間移動は一日3回しか使えない事。
これから立ち向かう敵は自由に空を飛べるから、万が一のために瞬間移動は温存した方がいい。
そうじゃないと、回数を使い切ったせいで落下死するなんて嫌だもの。
こんな訳の分からない所で死ぬなんて嫌よ。
「ん!?やばい!!気づかれたぞ!!」
え!?
上空から。
来た!!
どうする!?
「戦う？」
「戦うにしても、足場が不安定だ」
確かに。
外から丸見えな階段にいる。
ちょっとバランスを崩したら地面へと真っ逆さま。

戦うには機動力が使えないわ。
「仕方無い。『シルフ！』」
え！？
健一が、精霊を使った！？
どうやら、健一も私と一緒で能力を使いこなせるようにしてたのね。
そして。
風のバリアでハーピーの攻撃を防ぐ。
それを感じて、ハーピーは遠ざかって行く。
「良かった。今のは軽く攻撃してきたから防げたけど、本格的に来たらやばかったかも」
「へ？どういう事？」
「僕の能力は遠距離まで効力あるから、どうもそのせいで威力はそれほどでも無いんだよ」
あらら・・・。
利点があれば欠点もあるって所ね。
まぁ、私の能力もそういう点では一緒だけど。
となると・・・。
あっちが本格的に狙って来る前に、なんとか頂上へと行かなきゃ。

第2章　13話

ようやく頂上が見えて来た。
けど。
健一がだいぶへばっている。
無理も無い。
ここまでずっと階段で上って来たものね。
私は空手を習っていて、運動してるからそれなりに大丈夫だけど。
健一は運動よりも勉強をする方だし・・・。
疲れて当然って所ね。
仕方ないわ。
「休憩しましょう」
かなり危険だけど、このままハーピーと対決する方がよっぽど危険だわ。
さて。
問題はどうやって戦おうかしら。
今度の敵もかなり強そうだし。
「美喜子、何を考えている？」
へ？
「えっと、どうやってハーピーと戦おうかなって」
だって敵は空を自由に飛べるしね。
どう考えても、こっちはかなり不利。
能力があっても、ちっとも有利な状況では無いしね。
「いいか？僕達は水晶のドクロを取るのが最優先だ。別にハーピーを倒す必要は無い」
健一は相変わらず非戦闘的ね。
そりゃあ、無事に取れるならそれに越した事は無いけど・・・。
少なくとも戦う方法は考えた方がいいわ。
まず戦う事になるし。

え!?
それは突然だった。
「ハーピー!!」
どこからともなく表れた!!
いや。
頭上からやって来たんだわ!!
心理的死角!!
まずい。
「危ない!!」
え?
健一が私をかばう。
その結果。
「健一!!」
そのまま。
ハーピーに連れ去られてしまった。
くっ!!。
追いかけなきゃ!!

第2章　14話

くっ！
早く助けに行かなきゃ！！
私を助ける為に連れ去られてしまった。
能力を使いつつ階段を登る。
こうなってくると、この能力が何度も使えるというのは大きい。
長続きしないという欠点さえ目をつぶれば便利な能力だわ。
やっと頂上が見えた。
この上にハーピーの巣があるのね。
私は躊躇なく、一気に頂上へ登る。
あった！
ハーピーの巣。
塔の頂上に大きな巣が見える。
ここからだと、ハーピーの姿が見えない。
健一がどうなってるのかも分からない。
よーし。
私はジャンプして巣の端に捕まる。
これは。
巣は木等の枝とかを集めてるイメージがあったけど。
これは針金や、ハンガーみたいな感じね。
これならこのまま力任せに登れるわね。
「はぁ！」
能力を使って巣へと上がる。
あれ？
健一はいたけど、ハーピーの姿が無い。
「大丈夫？健一！！」
私は駆け寄る。
「あぁ。なんとか能力のおかげで助かった」

なんか。
えらく安心してるけど。
「なんかあったの？」
「ほら。あいつって雌だろ？」
雌？
あぁ、そういえば姿は女性だったわね。
「そして、雄がいない。そこで手近な雄が表れたらどうするか」
えーっと。
「もしかして、襲われそうになった？」
「もしかしなくても！能力が無かったらやばかった」
うっ。
「にしても良かった。キスもまだだったから」
へー。
健一って、まだなんだ。
まぁ、私もまだなんだけど。
そう考えると安心したわ。
「美喜子！！来たぞ！」
はっ！
ハーピーが見えた！！

第2章　15話

来た！
ハーピーだわ。
こうなったらなんとか戦わないと。
空から襲う相手と戦うのは、当然初めて。
いくら能力があっても不利な事、この上ない。
くっ。
「美喜子！無理に倒す必要は無い。ただ時間をかせいでくれ」
「？どういう事？」
「水晶のドクロを探す！ここにあるはずなんだ」
そうだ。
健一を取り戻す事で頭がいっぱいになってたけど。
そういえば、私達は水晶のドクロを探しに来たんだわ。
よし！
倒す必要が無いって言われると、だいぶ気が楽だわ。
いざとなれば逃げる事が出来る。
こういう時に瞬間移動が使えるのは大きいわ。
いくわよ。
はっ！！
ハーピーの足に捕まる！
自分から捕まる事で、逆に攻撃されなくなる。
そのまま。
背中に回る。
空を飛んでる相手にここまでやるのは、ハッキリ言って能力が無いと無理だわ。
あっと！
当然ながらハーピーが暴れる。
だけど。

このまま背中にしがみつく。
こういう空を飛ぶ相手はこういうのが苦手だって聞いてたけど・・・。
さすがに。
激しく暴れるわね。
うっ。
気がついたら、凄い遠くまで飛んでいた。
地上どころか、巣も小さく見える。
え？
急にハーピーの動きが止まった。
何をするつもり？
なっ！？
まさか！
急に地上へ急降下してきた！！
これは。
まずい！
力の能力は長続きしないのが欠点。
このまま落下し続けたら。
当然、能力はもたない。
となると当然。
私自身の力じゃ、この衝撃には耐えられない。
まずい。

第2章　16話

まずい。
非常にまずい。
私本来の力なんてたいした事ない。
そりゃあ、空手を習ってるから普通の男よりも力はあるけど。
こんな衝撃に耐えれるほど鍛えては無い。
「あっ！！」
ついに手が離れてしまった。
くっ。
やはり瞬間移動を使わなくてはいけなくなったわ。
下を見る。
え？
突風が吹き荒れる。
落下スピードが下がる。
これは。
健一だわ。
こんな都合良く自然現象が起こる訳が無い。
健一も健一でサポートしてくれるのね。
あちこち見渡す。
ハーピーは？
いた！！
やっぱり落下スピードが落ちてる事に疑問を感じてるのか、さらに私に目標を定めて来る。
やはり直接決着をつけるつもりね。
私は下にいる健一に目線を送る。
健一も何かに気づいたらしい。
こういう時、幼なじみってのは便利ね。
考えてる事が分かってくれてる。

よし！
一気にいくわよ！！
攻撃されるまで待つってのは性に合わない。
決めたら躊躇しないのが私の長所。
健一の風が止まる
自由落下でハーピーの前へ近づく！
そして。
拳で腹を突き破る！！
え・？
ハーピーの姿が消えて行く？
どういう事？
「健一！」
私がそう叫ぶと、また突風が吹き荒れる。
うん。
私の行動が良く分かってくれてるみたい。
「美喜子！水晶のドクロも見つけたよ！！」
どうやら、目的の物も見つけたみたいね。
気がつくと、巣から木の枝が生えてそれがクッションとなる。
いれたりつくせりね。

第3章　三角形

なんとか無事に帰れた。
行った経由も不明なら、帰れた理由も不明。
まったく。
科学的じゃないから説明も出来ないってのはなぁ。
美喜子はありのままを受け入れてるせいか、もう気にしてない。
僕が考えすぎなんだろうか。
それにしても。
今回の水晶のドクロ。
また座標が書かれてると当然思っていた。
だけど。
そこには「Ｔｒｉａｎｇｌｅ」と英語で書かれているだけだった。
つまり三角形。
どういう意味なんだろうか。
三角形の建物って意味だと、ピラミッドしか思いつかない。
だけど、ギザのピラミッドはすでに行ってるし。
他にもピラミッドはあるけど、いくつもありすぎてどれと断定は出来ない。
困った。
美喜子は当然、僕に期待している。
こういう頭脳的な事は僕の方が得意だと思ってるし。
なんとしてもこの意味を解かなくては。
ピンポーン。
なんだ？
家のチャイムが鳴った。
今、この家には僕一人だけ。
美喜子なら、チャイムを鳴らすなんて事をせずに勝手に入ってくるはずだし。

誰なんだろう？
玄関の扉を開ける。
「どなたです？」
そこに立ってる人を見て驚いた。
そのあまりの綺麗さに。
確かこの人。
うちの学校の中でも一番の美人という噂の林道さんじゃないか。
どうしてここに？
「あら。美喜子さんに会いに来たんですけど。どちらさまで？」
美喜子に？
「美喜子の家はこっちじゃないよ。隣」
意外と抜けてる人なんだな。
「あら。それではあなたが山本君？」
「うん。美喜子から聞いてるのかい？」
わざわざ会いに来たって事は、少なくとも仲が良いって事だ。
そうなると、美喜子から僕の事を聞いてても変じゃない。
「ええ。お隣の”健一君”って」
やはり。
「美喜子に用事あるんだろ？」
「あっ、そうでした。水晶のドクロの事でお話をしようと」
水晶のドクロだって？
なんでこの人がその事を！？
美喜子しかいない。
でも変だな。
いくら美喜子でも、この事は秘密にするべきだって事は分かってるはず。
なのに、なんでこの人が知っているんだろうか。

第3章　2話

僕は美喜子の家の中に入る。
「あれ？チャイムはいいんですか？」
「ん？あぁ、そうか。いや、僕達は勝手知ったる関係だからなぁ、チャイムなんてまず鳴らさないよ」
なんか、当たり前になってるからな。
「おーい、美喜子。お友達が来たぞ」
僕が2階に声をかけると、美喜子が降りてきた。
「お友達？」
そして、僕の後ろの林道さんに気づく。
「理恵子！！なっなんで健一と一緒に！？」
「いや。なんでも間違えて僕の家に来てね」
美喜子は頭を抱える。
「まったく。よりによって」
ん？
小声になってあんまり聞こえなくなったな。
「美喜子。そういえば、何故林道さんに水晶のドクロの事を？」
「え？あぁ。実は彼女も能力者なのよ」
なんだって！？
林道さんも、僕達と同じ？
なるほど。
それで水晶のドクロの事を。
あれにはこの能力と何かつながりがあると思う。
「そうそう。それで、何か分かったの？」
「あぁ。『Ｔｒｉａｎｇｌｅ』って事は分かったんだが」
この先がまだ。
「三角形って事ですわよね？それってバミューダトライアングルの事ですか？」

林道さんの言葉で僕は驚いた。
そうか！
三角形ってのは、何もピラミッドに限った訳じゃない。
そんな有名な場所を思いつかなかったなんて。
思いこみってとんでもないな。
「そうか。次の目標はそこか」
確かに三角形を限定するとなると、そこが一番適切だろう。
「やれやれ。またとんでもない事になりそうね」
それは言えてる。
「行くんですか？そんな危険な所に？」
「別に危険なのは今に始まった事じゃない」
ピラミッドの時も、ストーンヘンジの時も危ない目に合った。
もう危険なのは承知だ。
「それなら、水晶のドクロを林道さんに渡しておいて。一応彼女に預けてるから」
なるほど。
どこに保管してあるのかと思ったけど。
この家や僕の家では空ける事もあるし、万が一の事を考えたら妥当かもしれない。

第3章　3話

さて。
次の目標が決まったのはいいとして。
問題はどうやって行くかだ。
今回は海のど真ん中。
ストーンヘンジの時のように、瞬間移動を使うって訳にはいかない。
普通に船でいかなくては。
ただ場所が場所だ。
いかだでのんびり行くって場所では無い。
第一、何が起こるか分からない。
ある程度の衝撃にも耐えられるような頑丈な船でないと。
けど困った事に、船なんて買うお金なんて無い。
しかも借りるにしても、何が起こるか分からない。
下手すりゃボロボロになっても不思議じゃない。
そうなると、結局大金を使う羽目になる。
困ったな。
「それなら、私に任せてもらえますか？」
林道さん？
「まさか、付いてくるつもり？」
「いいえ。さすがに私は船の操縦は出来ませんから」
それを聞いて、心なしか美喜子が安堵したような気がする。
ん？
「船を1艘（そう）お貸しします。きちんと船長もいますからご安心を」
「いいけど。生死には責任取れないわよ。何せ自分を守るので精一杯なんだから」
確かにそれはそうだ。
これまでも能力を使ってギリギリ。
普通の人が付いて来ても危険だ。

でも、かと言って僕達は運転出来ない。
だから死ぬのを承知で来るしか無い。
「仕方がありませんですわ。そうそう都合良く能力者の船長が出てくる訳無いですし」
それはそうだ。
ここに3人集まってるだけでも、かなりの奇跡だし。
それにしても。
こんなに簡単に船を貸してもらえるなんて。
「林道さんって、かなりのお金持ち？」
「あれ？健一、知らなかったの？」
知らないよ。
「ちょっとした財閥の一人娘よ。だから学校でも人気あるんじゃない。綺麗で優しくてしかもお金持ち。完璧じゃない」
確かに、そこまでそろっていたら人気はあるに決まってる。
「健一も、こういう子が好みなんじゃない？」
「別に？」
確かに、人としていい人であるのは認めるけど。
それと女性の好みとは別。
「ずいぶん、あっさりと否定しましたね」
「本人の目の前でちょっと言い過ぎたかもしれないけど、どうにも僕の好みとは違うから仕方無いしなぁ」
まぁ、別に林道さんはモテるらしいから、別にいいかな。

第3章　4話

船による旅が始まった。
さて。
「美喜子。ちょっといいかい？」
「？どうしたの？突然」
僕はこれから起こるかもしれない問題を、今のうちに解決した方がいいかもしれない。
「実は、この旅が終わる頃には両親は帰ってくるだろう」
「そうね。そんなに長い間じゃないもんね。それで？」
「それでじゃない！両親が帰って来るって事は、夏休みも終わりが近いって事だ！！」
そう。
それが問題。
両親は上手い事誤魔化せばいい。
どうせ僕達の事を将来結婚すると本気で思ってるんだし。
二人で何泊もする旅行に行った所で、それほど心配はしないだろう。
だけど、学校はこうはいかない。
きちんと出席しないといけないし、課題もやらないといけない。
「うっ、そうね。学校の問題があったわね。私は別に勉強の為に行ってる訳じゃないから、まだいいにしても、健一の方が問題ね」
美喜子はその運動能力を買われて入学したから、勉強中心って訳では無い。
だけど、僕は普通に受験に受かって入った。
それに二人とも、出席日数が足らなかったら留学する。
いや。
今回の旅がまだ3個目の旅だと考えると、もっと大変な目に合う。
まだあと１０個も探し求める旅をしないといけない。
ハッキリ言って、日帰りで行うというのは無理がありすぎる。

かと言って土日の2日間だけで終わるかと言うと、それも保証は出来ない。
ピラミッドの時やストーンヘンジの時だって、かなり時間がかかっている。
それを考えると、学校の問題を解決しないといけない時期に来ている。
僕達の夏休みは、もうすぐ終わろうとしているからだ。
まだ夏休み中はいい。
夏休みの課題も、やり終えたと言っていいほどに片付けた。
これも、夏休みが始まった辺りから集中的にやったおかげだ。
でも。
夏休みが終われば、また学校へと通う日々が続く。
これだけはなんとも出来ない。
僕達は、学生なのだから。
「困った」
「確かに、困ったわね」
もしかしたら。
水晶のドクロを手に入れるよりも困った問題かもしれない。

第3章　5話

いよいよ問題の海域に到達する。
はたして今度は何が起きるのだろうか。
前回、ストーンヘンジに来ていたのに知らない街に飛ばされたという経験がある。
だから、また今回も予想もつかない事になっても不思議では無い。
もう僕達の冒険には常識が通用しなくなってきている。
ん？
「なっなんだ！？」
船長も驚いている。
無理も無い。
船が下へと沈んで来ているからだ。
沈没している訳では無い。
普通、沈没するなら船が斜めになっていく。
沈没した原因の穴から海水が入って行くからだ。
でも、そうじゃない。
船は真下へ沈んで行く。
そして。
ついに船は海面より下へと沈んでしまった。
でも。
海水が船の中に入る事は無い。
まるで、空気が固まって周りを包んでいるような感じ。
「凄い、これ健一の能力？」
どうやら美喜子は、これを僕がやってると思ってるらしい。
無理も無い。
僕もこれと似たような事が出来るからだ。
でも、僕はハッキリと言う。
「いや。これは僕じゃない」

これまた、不思議な現象だ。
船長は目を丸くしている。
まぁ、無理も無いだろう。
こんな事、僕達ですら呆気に取られてるぐらいだし。
「見て！下に都市が見える！！」
美喜子の指さした方向には。
確かに。
海の底に大きな都市が見えた。
あれはいったい。
いや、あれが何処かというのはそれほど問題にはならないだろう。
僕達にとって、あそこに水晶のドクロがあるって事だけで十分だ。
はたして何処にあるのか。
そして唯一の問題は。
一体何が待ち受けているのやら。

第3章　6話

船は海底へと着いた。
そこに広がるのは巨大な街。
こうして見ると・・・凄いな。
「これは一体・・・」
船長も驚いている。
「悪いけどここで待ってくれないか？この街を探索してみる」
僕と美喜子は船から降りる。
ここから先は僕達の領域だ。
残念ながら、一般人である船長には待っていた方がいいだろう。
それにしても。
誰もいない。
ここも、すでに滅んだ街なんだろうか？
前の街が洪水で滅んだけど。
ここもそうなんだろうか？
しかし。
海の底にあるってのが不思議だ。
どういう原理なんだろうか？
それはこの街を探索すれば分かる事なんだろうか？
不思議なまま終わる可能性もあるけど。
「ねぇ、今回は何処にあるのかしら？」
早くも美喜子は水晶のドクロの場所を心配している。
それはそうだろう。
ピラミッドの時は骸骨達を倒したら出て来た。
そしてストーンヘンジの時はハーピーの巣から出て来た。
という事は。
この街でも何やら化け物がいて、そいつの所に水晶のドクロがあると思う。

そして。
その化け物の相手はおそらく美喜子がやる事になる。
もちろん男である僕がやらなくちゃいけないとは思うけど。
残念ながら、僕の能力では化け物を倒すのはかなり大変。
傷をつけるのが精一杯だろう。
その代わり遠距離からでも攻撃出来る利点があるのだけど。
でも化け物を倒すとなると、美喜子のように鉄すらもぶち破る力が無いと無理だろう。
「ん？何あれ？」
美喜子が何かを見つけた。
美喜子はこういう何か他とは違うものを見つける感性みたいのも得意だよな・・・。
それは。
巨大な教会だった。

第3章　7話

中に入るとそこは豪華な場所だった。
「うわ、凄い」
思わずそう言っても仕方無いだろう。
でもここに何が？
「こりゃあ、一体何だ？」
え！？
後ろから声が聞こえた。
僕達は振り返る。
そこには。
船長がいた。
「なんでここに？待っていてって言ったのに」
「何言ってんだ。こんな不気味な所で一人で留守番なんて、不安で仕方無いだろ」
気持ちは分かるが。
「ったく、何があっても知らないわよ」
この美喜子の言う事も分かる。
とにかく、これまでの冒険で嫌というほど危険だって事を知っているから。
だからこそ、普通の人には安全な所で待っていた方がいい。
船が安全かと言えば断定出来ないけど、少なくとも降りるよりは安全だろう。
そう考えていた時。
何かが歩く音が聞こえて来た。
「なんだ？」
船長が窓から外を見る。
僕達もその後ろから見る。
そこには。

「なっ！なんだ、ありゃ！？」
船長が驚いたのも無理も無い。
何せ外を歩いていたのは恐竜だったからだ。
それこそ恐竜なんて、映画とかのフィクションの世界だろう。
しかもそれが大量に。
「これ全部倒さないといけないの？」
美喜子が小声で聞く。
だけど僕が首を横に振る。
「この恐竜はステゴサウルスと言われる恐竜だ。いわゆる植物食恐竜。それが僕達の敵とは考えにくい」
「おいおい！なんだそりゃ？」
船長も聞いていたらしく、僕に聞いて来る。
「つまり、あれは分かりやすく言うと馬とか牛とかのような植物を主に食べる草食動物と同じような生き物だ。気を付けていれば大丈夫だとは思う。ただ生き物だから絶対とは言えないけど」
馬や牛だって人に危害を与える場合もある。
だからこそ植物食恐竜だからと言って、完全に安全とは言えない。
だけども、積極的に危害を与えるとも思えない。
そう。
だからこそ、ああやって群れで歩いているのだろう。
そこで重要な事を気づいた。
草食動物が群れで動く理由。
それは肉食動物から身を守る為。
そうだ。
植物食恐竜がいるって事は、肉食恐竜がいてもおかしくない。
もしかしたら、それこそが僕達の敵かもしれない。

第3章　8話

ステゴサウルス達は去って行った。
街に危害を加える事も無く。
ふぅ。
緊張は解いていいだろう。
さて、情報を得ないと。
何故ここに恐竜がいるのか？
その辺りが気になる。
そして。
この街でも人の気配が全く無い。
ここでも人類が滅んでしまったのだろうか。
それも気になる。
何故こうも滅んでしまうのか。
もしかしたら。
現代の人類に対する警告なのだろうか。
「何難しい顔してんの？」
「いや。何故ここでも人がいないんだろうか？って思ってね」
僕は素直に言う。
「確か前の時は洪水のせいだったよね？ここではどうなんだろう」
そう。
恐竜が存在するって事も気になるけど、それも気になる。
「まぁ、難しい事は健一に任せるわ。私は何か無いか調べてみるわ」
やれやれ。
でもまぁ。
美喜子は自分の役割を分かって来ている。
自分はそれほど勉学が得意とは思って無い。
その代わり直感的な感覚は優れている。
だからこそ、僕も美喜子にはその直感に頼ってる部分もある。

その代わり、僕はその見つけた物を調べないといけない。
それが僕達のやり方。
そうやって、僕達はピラミッドの時もストーンヘンジの時もやって来た。
「健一！！これ！」
ん？
また何かを見つけたようだ。
いや。
それは最初から僕達の前にあった。
だけど、船長が出てきたり恐竜の出現できちんと見ていなかった。
それは。
「恐竜！？」
そう。
ここは教会。
普通そこに神の偶像があるはずなのに・・・。
恐竜の偶像があった。
ここでは、恐竜が神なのか！？

第3章　9話

そして。
その偶像の下には1冊の本があった。
おそらく、この教会の教本なのだろう。
僕はそれを手に取り、中身を見る。
うっ、これは。
「どうしたの？」
美喜子が不思議そうにのぞき見る。
「げっ！？何これ？」
そう。
まるっきり分からない。
いや、美喜子の場合は外国語に詳しい訳では無いからこういう言葉も自然と出て来るだろうけど。
僕が怪訝そうな表情をしたのは、これがまったく見た事のない言語で書かれていたからだ。
おそらくこの街では通用していた古代文字なんだろう。
だけど僕にはまったく分からない。
これまで色々勉強はしてきたけども。
まったく見覚えの無い言語が出てくるのは初めてだ・・・。
でもこれも自然な事かもしれない。
出て来る文字が全て知ってる言語とは限らない。
現代では無くなった古代だけの文字があって当然。
ページをめくると、所々絵があってそこには恐竜の絵もある。
たぶんこの街、いや世界かもしれないけれど、恐竜を神として祭っていたのは間違い無いだろう。
その辺りの思想は現代でも通用するような部分がある。
一目で教会と分かる作り。
そして偶像。

だけど何故そこで本物がいるのかには繋がらない。
しかもこの偶像はさっき見たステゴザウルスでは無い。
これはＴ－レックス。別名ティラノサウルスという僕達の世界でも有名な恐竜の代表だ。
肉食恐竜の中でも最大級の肉食恐竜の一種だ。
それが神として崇められている。
いや。
もしかしたら恐れられていたのかもしれない。
その辺りは日本を始め神としての共通項だ。
単に人間よりも凄いから祭ってるのでは無く、恐れられてる可能性は高い。
だけど、それはあくまで推測。
ここに書かれてる事が分かれば、その辺りが分かるかもしれないのに。
「なんか難しい顔してるけど、健一でも分かんないの？」
「ああ。これは古代文字だ。いくら僕でも現代に残ってない文字までは読みようが無い」
早々と降参を決めた。
読めないものは仕方ない。
なら、この偶像に祭ってるのが僕達の敵と思っていいだろう。
謎は残ってるけど、それを調べる術も無いし。
「あら、私なら分かりますわよ？」
不意に僕達の背後から声がした。
これは船長の声じゃない！！
女性の、しかも聞いた事のある声。
「うげっ！？理恵子！？」
そう。
僕達の背後にいたのは。
林道理恵子さんだった。

第3章　10話

「まったく、おとなしく待っていろって言ってたのに」
こんな所にまで来るなんて。
「妹の事もありますから。私はじっと待ってるのは性に合わないんです」
また凄いな。
静かで大人しそうな雰囲気なんだけど、意外と行動力があるんだな。
「ったく。言わなきゃ良かった」
美喜子も後悔している。
「貸してもらえます？私は触れた物の情報を得る事の出来る能力を持ってますから」
そういえばそうだった。
こういう場合は便利な能力だけど・・・。
「ん！」
確か彼女は戦闘能力は無かったはず。
これからが大変だ。
「これは、どうやら彼らは神になろうとしていたようですね」
「神に？」
それは良くある話だけども。
「つまり、彼らは自らのＤＮＡを操作して姿から変わろうとしていたようです」
「え！？それじゃあ、あれは元は人間だって言うの！？」
なんと。
この世界でも人類はいないと思っていたが。
まさかＤＮＡを操作して変化した人間だったとは。
「お二人とも良く聞いてください。どうやら、その中の一人が例の水晶のドクロを所有しているようです」
「なんですって！？」

まさか！！
なんとなくは予想はしていたけれども。
「そんな事まで書いてあるの？」
「ええ。どうやらあれは神の中でも一番の人に選ばれる王冠みたいな物らしいですね」
持ってるだけで一番偉くなるという象徴の物か。
どうやら、この世界でもあの水晶のドクロは特別な存在らしい。
と、なると。
「やはり持ってるのは、これって事か」
僕は偶像を指さす。
そう。
この教会でも偶像にするほど象徴的な存在。
おそらく、ＤＮＡを操作して姿が変えられるのなら誰もがなりたいと思う存在。
Ｔ－レックス。
「ふん！上等じゃない！例え相手が恐竜でも叩きのめしてやるわ！！」
やれやれ。
美喜子は本当に頼りになるな。
「二人は今度こそ、この教会で待ってるんだ。僕達はこれから恐竜と戦う。死にたくなければ待っていた方が得策だ」
そう。
恐竜相手に戦えるほどの力が無いと、これから先は無理だ。
美喜子は直接戦闘をする能力が。
僕だって精霊の力で身を守る事も戦う事も出来る。
まず船長は無理だし、林道さんだって戦闘能力があるか。
「あら。何度も言いますけれど、私はじっと待ってるのは性に合わないんです」
林道さんはそう言うと、ほうきを取り出した。
「？それは？」

「これが私の武器なんです」

第3章　11話

僕達3人は外へと出る。
どこかにいるだろう、Ｔ－レックスを探して。
「そいつが水晶のドクロを？」
「まず間違いないだろうね。何せＴ－レックスは恐竜の中でも最大級クラスだ。他にもいるけど偶像になるほど有名って事だし」
ん？
恐竜たちが逃げている？
「どうしたの？私達を無視してるみたいだけど」
「つまり、それほど本気で逃げなくちゃいけない相手だって事だ」
と言う事は。
「いました！！あの偶像そっくりの恐竜が！！」
いた。
あれが本物のＴ－レックスか？
いや、ＤＮＡ操作してるから本物とは言えないかもしれないが。
とにかく、あいつだ！
間違いない！！
「さあて。ようやく目的も見つけたし戦うとしますか！！」
美喜子はそう言うと、臆する事なく走り出す！
もちろん、Ｔ－レックスもそんな美喜子をすでに目で追っている。
だけど。
突然美喜子の姿が消えた。
いや。
スピードを上げたんだ！
あれも美喜子の能力だからな。
あれ？
隣にいたはずの林道さんの姿がない。
あっ！

林道さんも恐竜に向かって走ってる！！
凄いな。
美喜子に負けないほど活動的だったとは。
しかし。
あのほうきでどうやって戦うんだ！？
「はっ！」
すでに美喜子は、恐竜の近くで殴ってる。
早い。
そこに林道さんが。
「えいっ！」
普通にほうきで叩いただけに見える。
だけど！！
ほうきであたった部分だけ鋭い切り傷が出来ている。
まるで刀で切ったように。
これは！？
「ふふっ。これは邪悪なるものを切り祓うほうき。全てを祓ってさしあげますわ」
これは凄い！

第3章　11話（後書き）

次回更新は11月29日（月）予定です。

第3章　12話

戦い初めて約5分。
僕はある事に気づいた。
「美喜子！林道さん、一旦下がって！！」
僕は二人を下がらせる。
「？どうしたの？」
美喜子は不機嫌そうながらも下がっている。
「変だと思わないか？」
「え？」
やはり戦ってる本人は分かって無いみたいだ。
「だって、美喜子の能力は鉄も曲げれるほどの力がある。普通の生物なら1撃でも死んでいるはずだ。なのにあの恐竜には何発攻撃している？」
そう。
あれは普通じゃない。
いや、恐竜の時点で普通じゃないんだけど。
とにかく、凄いスピードで傷が回復してるのは間違いない。
どんなＤＮＡ操作してるんだ？
「なるほど。あの敵の情報を得なくてはいけないんですね」
「そういう事だ。林道さんにはかなり危険な役目をしなくてはいけないけど」
触れるほど近づくってのは、僕の想像以上だ。
美喜子は元々空手を使うから、それを覚悟しているけれど。
林道さんは武器を使ってる。
その武器の間合いよりも近づくってのは、それだけで危険だ。
それぐらいは僕でも分かる。
「大丈夫よ。私が動きを止める」
美喜子も危険な役目を引き受ける。

「林道さん。一気に触れてくれないか？美喜子の能力の欠点は長時間持たない事だ。おそらく１０秒も持たない」
だから、一気に行うのが好ましい。
「分かりました」
「よーし、やってやるわよ！」
まずは二人一緒に走る！
恐竜も向かって来ている。
だけど。
僕の風の精霊の力で、だいぶ動きは鈍くなっている。
僕の力ではこれぐらいが精一杯だ。
なにせ長所といったら、遠距離でも使えるぐらい。
あとは見守るぐらいしか出来ない。
「はっ！」
美喜子が恐竜のアゴを狙う。
一気にアゴまでジャンプしている。
さすがにアゴを狙われては、恐竜の動きも止まる。
美喜子の狙いはこれか！
自分の能力を知り尽くした上で、最善の行動を起こしている。
すかさず、林道さんが恐竜の足に触る。
一歩間違えば、蹴りをくらってもおかしくない。
だけど、それを美喜子が防いでいる。
アゴを狙われ、体制が崩れている。
こういう時は自然と踏ん張るために、足に力を入れる。
その為、逆に足下は安全とも言える。
「これは！？」

第3章　12話（後書き）

次回更新は12月5日（月）予定です。

第3章　13話

「それで？どうだった？」
「かなりやっかいな事が判明しました」
やっかい？
どういう事だ？
「あのＤＮＡには、傷を治す細胞が異常なほどにあります。おそらく、ダメージを受けた次の瞬間から治っているのでしょう」
なんだって！？
「ちょっと待って。それじゃあ、いくら殴っても意味が無い！？」
戻って来た美喜子も驚いている。
そういえば。
林道さんが切った部分からも血が流れていない。
いや。
それどころか、その切り傷も無くなっている。
そこまでは気づかなかった。
いや。
血が出ない事は変だとは思っていたけど、恐竜の構造が分かってなかったから大して重要とは思っていなかっただけかもしれない。
ともかく。
あの恐竜には攻撃は利く。
だけど、異常なスピードで治るってだけか。
確かにやっかいだ。
「どうすればいい？あんな巨体じゃあ心臓を狙うってのも、かなり無理っぽいし」
それに、狙っても瞬時に治る可能性もある。
どうしたらいいんだ。
こっちの攻撃力では、治る以上のダメージを与えるってのは無理だ。
林道さんも、どうしていいか分からない様子。

せめて、もう少し細かい情報が分かれば。
「そうだ。林道さん。もう少し詳しく知らせてくれないか？」
「え？」
「そのＤＮＡの事だよ。僕はそういう事には詳しい。詳しく知ればきっと弱点も分かる！！」
「そうは言われましても・・・」
かなり困った様子だ。
「！！恐竜が来るわよ！！」
くっ！
ぐずぐずしてる場合じゃない！！
「早く！」
「！分かりました」
林道さんは覚悟を決めた。
「額を貸してもらえますか？」
「額？」
「はい。私の知った情報を送る唯一の方法です」
それなら。
僕は額を少し前に出す。
「それでは」
すると。
林道さんも額を出して、僕の額に当てる。
「なっ！何をしてんの！？」
「これが唯一の方法なのです」
それこそ、目と鼻の先に林道さんの顔がある。
だけど。
そんな事に動揺してるより先に、頭の中に情報が入る。
「！！これは」
「恐竜から得た情報です。私が分かったのはごく一部ですけど」
なるほど。
かなり細かい事まで情報として得ているようだ。

ＤＮＡの情報までである。
確かにこれは専門的に勉強してないと、分からないかもしれない。
これは。
ＤＮＡと共に元素記号の情報も入る。
しめた！
僕にとっては、こっちの方が専門分野だ。
ん？
これは。
「来るわよ！！」
あった！！
たった一つ、唯一の弱点が！
この元素記号の意味する所は一つしかしない！

第3章　14話

「僕に任せてくれないか？」
これは他の人には頼めない。
それぐらい、覚悟を決めた行為だ。
「大丈夫ですか？」
林道さんが心配してくる。
「ああ。いいかい？何があっても手出しはしないで欲しい」
「！分かった」
どうやら美喜子はかなり危険な事だと分かってるようだ。
こういう時、幼なじみは話が早い。
そう。
二人はなんだかんだ言っても女性だ。
これからやる事は女性には頼めない。
なら、僕がやるしかない！
恐いけど・・・。
「来ます！！」
口を開けて、まさにかみ殺そうという勢いだ。
これなら。
僕のやろうとしている事も簡単に出来そうだ。
後は僕の覚悟だけ！！
行こう！！
僕は恐竜に向かって走る！
そして。
まさに飲み込もうとした瞬間！！
後ろへ体重を乗せる！
そのまま倒れるほどの勢いで。
だけど。
わざと左腕だけは伸ばしている。

恐竜は僕の左腕を噛む！
「ぐっ！！」
痛いなんてもんじゃない！！
だけど。
覚悟を決めたんだ！！
我慢するしか無い！
「山本さん！？」
「待って！理恵子。健一が手出ししないでって言ったんだから、そのまま見守るの」
「でも！！」
「あれは承知の上よ」
やはり。
美喜子は気づいてくれた。
良かった。
くっ！
だいぶ血が出たかな。
「炎の精霊よ！」
恐竜の口の中に炎を出す。
さすがの恐竜も、一旦口を開ける。
そこで僕は左腕を引っ込める。
よし！
狙い通り。
「大丈夫ですか？」
林道さんが声をかけてくる。
「なぁに。僕には治す事も出来る」
そう。
光の精霊の力で傷は治せる。
そして。
「え！？」
そう。

恐竜が苦しんでいる。
あれほど攻撃した時には、全然苦しんでいなかったのに。

第3章　15話

「どういう事？」
美喜子が不思議に思っている。
「ほら拒否反応ってのがあるだろう？あいつは自ら細胞を回復するほど細胞が異常なんだ。そこに違う物質を投入したら」
それがあの結果だ。
「それにしても思い切った事をしますね」
「仕方無いだろう。こんな事、女性には頼めない」
いくら治せるとは言っても、危険な事には変わりない。
林道さんには頼めないし、当然美喜子にも頼めない。
「無茶な事をするだろとは思っていたけど」
「理解してくれて助かったよ」
美喜子には感謝するよ、まったく。
恐竜はだんだん弱まっていく。
「あと一つ。あの膨大な細胞を理解したんですか？」
「ああ。科学は得意な方でね」
将来、科学者の道に行こうかと思ってるぐらいだ。
元素記号の情報も理解しなきゃならない。
「んで、あれもう倒していい？」
「ああ。もうあの恐竜は細胞が混乱して、ボロボロな状態だ」
自ら細胞を回復する能力が災いしたみたいだ。
「よーし！！」
美喜子は喜々として走り出す。
いつも元気で僕も助かる。
あの元気で僕も元気を貰える。
「はぁ！」
一撃で恐竜は倒れる。
まぁ、予想通りだ。

あれだけ細胞が混乱していれば、当然かもしれない。
「あれ？もしかしてあの恐竜、肉食なのに肉を食べていない？」
「そういう事。あれは姿形こそ肉食だけど肉を食べていない」
「どういう事？」
「つまり林道さん。あれは全て自分で供給してるんだよ。あの傷の回復量は見ただろう？」
だから、あれは食料も必要としない。
それこそが、彼らが目指した”神”の存在。
確かに。
食料を必要としないというのは、他の生物を殺す必要も無い。
理想的な話だ。
だが。
残念ながら、動物の本能を完全に消す事は出来なかった。
だからこそ、他の生物を襲う事がある。
そして。
それが僕達にも向けられたんだ。
「あれも、科学の悲劇的な末路って所だろうね」

第3章　16話

Tーレックスは倒れ。
そこから水晶のドクロが出てきた。
これでようやく、ここでの目的が果たせた。
「ん？」
美喜子が何かに気づく。
なんだ？
「あれ？この街を覆ってる空気が、減ってない？」
なに！？
僕は上空を見る。
確かに。
上に見える海水の位置がだいぶ低くなっている。
どういう事だ？
「何にしても、船へと戻りましょう！」
林道さんの言う通りだ。
考えるのは後。
どうも、一刻を争う自体になってきている。
まずは教会へ立ち寄る。
当然、船長がいなくては帰れないからだ。
そのまま船へと走る。
まずい！
どんどん海水が降りて来ている。
このままでは、僕達も海の藻屑になってしまう。
やっと船へとたどり着いた。
だけど。
どうやって上がればいいんだ？
「どうすれば！！」
このままでは。

まてよ。
「美喜子、行けるか？」
「あっ！そういう事ね。了解！」
話が早い。
そう。
この船ごと、瞬間移動すればいい。
美喜子は片手で船の縁をつかむ。
そして、もう片手に僕の手を握る。
「船長！僕の手を握って！林道さんはさらに船長の手を握るんだ！！」
「え？」
「早く！！」
美喜子の能力は触れている対象しか瞬間移動出来ない。
逆に言えば、こうやって繋がっていれば何人でも連れて行けれる。
ん？
林道さんが、僕の手を握る。
それを見て、船長が林道さんの手を握る。
「よーし！！行くわよ！！」

第3章　17話

助かった。
今回も美喜子の瞬間移動に助けられた。
「にしても、あの街は今頃海の藻屑なのよね」
確かに。
僕達が来なければ永遠にあったかもしれない。
そう思うと、気が重い。
僕達は完全に自分たちだけの都合で来ているのに。
「もしもーし。もしかして、何か思いこんでない？」
美喜子。
「あのねぇ。あれを見たでしょ？あれが幸せな形だと思う？ううん、不幸でしか無い。それを私達が終わらせたのよ。どうせ遅かれ早かれあの街は誰かに見つかっていた。それならばせめて事情を知ってる者に終わらせるのが彼らの幸せだと思わない？」
やれやれ。
そういう言葉が出るとはな。
確かに、そういう考えも出来る。
彼らは自分達の思い描いた理想とは大きくかけ離れてしまった。
何故恐竜を神としていたかは定かでは無いが。
その神になろうとしていたのに、現実は違った。
食事をする事が無ければ誰も傷つかないだろうと、あれほど遺伝子を操作したのに。
結局は本能に負けて、襲いかかって来た。
あの時。
林道さんから得た情報の中でも、あいつはいくつの命を奪っていた。
食う為では無く、純粋に獣の本能として。
だからこそ。
彼らは幸せでは無いという美喜子の意見はもっともだ。

「それにしましても、よく咄嗟にここまで出来ましたね」
林道さんが感心している。
「まぁね。何せ今回が初めてじゃないし」
それに。
話の早い相棒もいるしね。
「私。今回個人的な好奇心で付いて来ました。けれど今後も一緒に行くかはどうかは、少し考えさせてくれないでしょうか？」
「？いいんじゃない？別に無理に頼んだ訳じゃないし」
でもまぁ。
おそらく、これが普通の人の感性なんだろう。
突然船毎海の底へ連れて来られて、さらに恐竜にも出会った。
恐いと思って当然だ。
だけど僕達は違う。
やはりあの冒険がきっかけなんだろう。
小さい頃・・・。
僕達二人が巻き込まれたあの出来事。
思えば、あれのせいで美喜子は空手を習う事を決意し。
そして、僕は科学者の道を目指した。
あの時も、美喜子の勘が確か最初のきっかけだったが。
思うに、あれは必然的な冒険だったのかもしれない。
今回の冒険を乗り越える為に。

第4章　ナスカの地上絵

「おはよー」
「おはよう」
いつものように両親に挨拶をする。
そう。
帰って来たのだ。
当然ながら、いない間に起きた事は知らない。
いや、知らない方がいいかもしれない。
何せ、一歩間違ったら死ぬかもしれない冒険をしているのだから。
どうしようかな。
とにかく行ってみよう！
私は着替えて健一の部屋へと行く。
「どもー」
「美喜子か。今日来るってどういう事だよ」
「気になっちゃって」
どうにも好奇心は我慢出来ないしね。
「例の水晶のドクロなら、次の目的地は分かってる」
「本当？さすがね」
「次はナスカの地上絵だ」
へ？
「ナスカ？」
聞いた事も無い。
「ああ。結構有名な場所なんだよ。ペルーのナスカ川とインヘニヨ川に囲まれた所にあるんだよ」
「ふーん？」
ペルーって所も良く分からない。
後で地図でも見ておくかな。
「もしかして、聞くって事は当然行くって事だよね？」

「？当然じゃない。私達はそれが目的で冒険して来たんだから」
水晶のドクロを7つ集める事が私達の目的。
集めると具体的にどうなるかまでは分からないけれど・・・。
だけど、ピラミッドの時に手に入れてしまった。
おそらくこれを集める事が、私達の運命なんだと思う。
まるで導かれるように、次々の目的地への道を記しているし。
とにかく、私は考えるのは後。
難しい事を考えるのは苦手だし。
「今日が何日か知ってるのかい？」
「知ってるわよ。夏休み最後の日の8月31日でしょ？」
何を言いたいのかは分かってる。
何日もかかる冒険になると、始業式に影響する。
それは学生の身の私達には重要な事だとは分かってる。
それでも。
「それでも行きたいの！だってそれこそ2学期が始まったら、冒険にいく暇が無いじゃない！！」
そう。
それが問題。
まだこの問題は解決出来ずにいる。
おそらく。
これは健一でも無理でしょうね。
何せ私達は学生。
そんなに何度も長期で休む訳にもいかない。
だからこそ。
行ける時に行っておくべき。
「分かった。美喜子は意志が固いからな」

第４章　２話

いつものように、私は瞬間移動で現地に到着した。
もちろんその辺りに適当に飛んでる訳では無い。
健一がネットで十分現地の情報を得てくれて、それを見てトイレ等に飛ぶ。
そこからこっそり出てくる訳。
今回はナスカ。
地上絵と始めに聞いた時、５メートルかそこらの規模だと思った。
しかし。
実際に来てみて、そのスケールに驚いた。
「これ、どこまであるの？」
「このハチドリの絵だけで９６メートルかな？」
９６メートル？。
そんなに広大な絵があちこちにあるなんて。
「一番大きいのは５０キロもあるらしいよ」
５０キロ！？
「そんなに！？」
「しかも正確に描かれてるらしいよ。上空９００キロじゃないと形が分からないほどなんだけど」
そりゃまたとんでもないわ。
「これもピラミッドやストーンヘンジ等と同じように、謎の多い場所なんだ」
確かに。
それにしても。
この広大な土地から何かを探さないといけないのね。
これは困ったわね。
これまではある程度限定出来たけれど。
「ねぇ。どれが一番怪しいと思う？」

これだけあるのだから、健一にも聞いた方がいいわね。
「うーん。僕は勘がいい方じゃないけれど。やはり一番怪しいのは、一番大きい絵だろうね」
「５０キロにも及ぶ絵、ね。確かに」
「それだけじゃない。その絵が矢印になってるって事だ」
え？
「矢印！？」
「ああ。あまりにも正確で誤差が無い絵が５０キロだ。一番怪しいと思う。さらにその先に何かあると言われてるけど、今でも発見されて無いってのも怪しい」
それは十分怪しいわ。
それかきっと、私達のような能力を持った人にしか案内されないようなものに違いない。
これまでの体験からそう思う。
私達はそこへと向かう。
「そう言えば」
そこへ向かう途中、健一が口を開く。
「地上絵も、夏至と冬至の日没の方向に正確に描かれてるそうだね」
「これも？」
確か。
ストーンヘンジの時も同じだったはず。
ますます謎が深まるわ。
いや。
それらの謎は結局の所、私にとってはそれほど重要では無い。
重要なのは、何があって何処に水晶のドクロがあるか。
それだけ。
集めたら何が起こるとか、どんな謎があるかというのも重要じゃない。
私はとにかく行動が先。
そういう難しい事は健一に任せておくわ。

第4章　3話

「そういえば」
不意に健一が口を開く。
「葉子はどうしたんだい？もう夏休みも終わるってのに姿を見かけないみたいだけど」
確かにそうね。
あの日から一度たりとも見てない。
そりゃあ健一も心配するでしょうね。
幼い頃からずっと私の家族とも仲が良かった。
当然、妹の葉子とも本当の兄妹みたいに仲がいい。
「さあ？会ってないから推測になるけど、私達みたいな事になってるんじゃない？」
「僕達みたいに！？」
「それしか考えられないじゃない。それ以外に突然長い間いない理由があると思う？」
そう。
私達はまだ瞬間移動等のおかげで、それほど日数がかからずに戻る事も出来る。
でも、すぐに戻れる状態じゃないとすれば。
「あっちはあっちで大変なのよ」
「なるほど」
さてと。
この辺りかしら？
私が怪しいと思った場所。
それがここ。
矢印のちょうど中心。
私は矢印の先とか端とかは怪しいとは思わなかった。
だいたい、その辺りは十分調べられてると思う。

でも、それ以外の場所はそこまで調べられてない可能性は十分高い。
しかもこの矢印の中心はそれこそ何もない。
こんな所、それこそ盲点だと思う。
「う〜ん。やはり何も無さそうだけど？」
「おっかしいなぁ。ここが一番怪しいと思ったんだけど」
私の勘も外れる事があるって事なのね。
「ん？」
あれ？
地面ばかり注意してたから気がつかなかったけれど。
ちょっと不思議な現象に気づいた。
「どうした？美喜子」
「あれ見て」
私は上空を指さす。
そう。
それは普通の雲に見える。
いや、それこそマジマジと見ないと見過ごすほどのごく普通の。
「？あれが何か？」
「気づかない？あれちょっと変じゃない？」
「何が。あっ！」
ようやく健一も気づいたみたいね。
「あの雲だけ、動いていない！？」
そう。
私達の真上で止まっている。
周りの雲は微妙ながら動いているのに。
「良く気づいたな、さすが美喜子」
「でも、あれどういう意味なの？」
こういう、何かを見つけるのは私は得意だけど原因までは分からない。
「そうは言っても、自然学的に考えてもありえないとしか」
「ねぇ。もしかして次の私達の目的地って、あれじゃない？」

第4章　4話

「なるほど。これまでの経験からして、あそこが目的地であるのは分かる。問題はどうやって行くかだな」
う～ん。
「私の瞬間移動は？」
「まだどこにあるか、正確な場所が分かってない。それに今日はここに来る時点で使ってる。あまり無駄には使いたくない」
確かに私の瞬間移動は一日に3回しか使えない欠点がある。
もし飛んだ先に何も無かったら。
最後の瞬間移動を使うはめになる。
なるほど。
そう考えると無駄には使えないわね。
先の事まで考えてるわね。
私はどうも目先の事しか考えて無いわ。
「それに。どうせ何か行く条件みたいのがあるんだろう。ストーンヘンジの時もそうだったし」
「あっ、そうか。この矢印も太陽の動きと関係あるもんね。かと言ってまた日没だと困るんだけど」
何せ明日は始業式。
学生の身としては欠席する訳にはいかない。
「いや。たぶん大丈夫じゃないかな」
え？
「どういう？」
「ほら。太陽がちょうど真上に登ろうとしている」
あっ、本当だ。
すると。
例の雲の所にかかろうとしている。
それをじっと見守る。

うん。
やっぱり私には健一が必要なんだなぁ。
後先考えずに行動する事が多い私。
だけど健一のおかげでだいぶ助けられている。
冒険をするようになってからは特に。
「!?美喜子!!」
え!?
突然、吉矢が私の手をつかむ。
なっ何!?
「え!?」
次の瞬間。
私達は見たことも無い草原の真ん中に立っていた。
「こ、これは?」
「おそらく、ここが空中都市なんだろう」
空中都市?
「何それ?」
「色々とお話はあるけど、一番有名なのはジョナサン・スウィフトのガリヴァー旅行記だろうね」
「え?それって、確か小人の国のお話じゃ?」
「それは4つある話の一番最初のお話だね」
へー。
4つもあるなんて知らなかったわ。
「その中で空中都市ラピュータの存在がある。これもそうなのかは知らないけれど、間違いなくここは空中都市だ」
「へー。その根拠は?」
「根拠?それはあれだよ」
そう言って、横を見る。
?
「あっ!」
そう。

遠くの所にそれはあった。
そこには草と同じ高さなのに、雲の塊があったからだ。
地上ではありえない光景。
なるほど。
少なくとも、ここは雲と同じ高さって訳ね。
「でもあんなにハッキリ見えるなんて」
「おそらく、ここの技術の一つだろうね。本当は水蒸気の塊だからあんなふうには見えないんだけど」
ふーん。
よく分かんないけど。
また、とんでもない所に来たのは間違いないわね。

第4章　5話

さて。
ここに来た目的はただ一つ。
何処かにある水晶のドクロを手に入れる事。
問題は何処にあるかよね。
「分かる？」
「分かる訳無いだろ。でも何となく今までの経験で推測は出来る」
「何処？」
「ずばり中心部」
なるほど。
確かに、そこが一番あるかもしれないわね。
おそらくそこには、この都市を浮かしている秘密も一緒にあるに違いない。
だいたいこういうのは、一番中心に重要なのを置いておくもんだしね。
それにしても。
「今回は人が作ったようには見えないわね」
「おいおい。こんな大きな塊が自然に浮く訳ないだろう？この空中都市そのものが人の作った証拠だよ」
うっ。
すっかり忘れてたわ。
何せ周りは普通の草原。
綺麗な花まで見える。
浮いていなければ、全然分からない。
こういうのもいいと思うんだけど。
あれ？
花？
「ねぇ。こんな高度でも咲いてる花ってあるの？」

「周りの環境さえ整っていれば咲くだろうね。山の山頂にだって雪が無ければきちんと花は咲くし」
へー。
「自然って凄いのね」
「ああ。これぱかりはいくら科学が進んでも敵わないだろうね」
あら。
健一が素直に認めた。
科学的な事は結構意地になる事もあるのに。
ドォン！
何！？
「今のは？」
「爆発音だ。何だろう、行ってみよう」
私達は走る！
やがて。
足場が固い石になって来た。
さらに人工的な建物なんかも見える。
「あれ！」
そこには。
人がいた！
私達以外に人がいるなんて。
しかも見知らぬ人。
初めてだわ。
どういう事？

第4章　6話

こっそりと様子をうかがう。
「何やってんの？」
「さあ。なんか壁を破壊しようと頑張ってるって所だけど、なんで破壊しようとしてるのかまでは分からない」
確かに。
頑丈そうな壁をダイナマイトみたいな物で壁を破壊しようとしている。
何故？
「くっ！もっと大量に持って来い！」
「はっ！」
ん？
あれ。
軍服？
「何処の国の軍なのかしら？」
「う～ん。僕はそういうのには詳しく無いから断定は出来ないけど。あれは間違いなく日本人だろうね」
「え？」
「いや。だって美喜子も今の会話を聞いただろ？」
あっ、確かにそう言えば。
普通に聞こえた。
「あれ？日本語ってそんなに広まってないの？」
「英語は色んな国で使えるけど、日本語は日本ぐらいしか使わないだろうね」
確かに日本語は難しいなぁ～と思う時はあるけどね。
あれ？
それでも変ね。
「なら、なんで日本人がここに？」

「それは分からない。でも日本人ならここに二人いるだろ？」
私達の事ね。
でも私達はちゃんと目的があってここに来ている。
なら、あいつらは一体？
「あっ、また大量に持って来たわね」
「どうもあの壁の向こうに何かあると確信してるんだろう。何処かで地図でも手に入れたのかな？」
確かに。
初めて来る場所の壁の向こうなんて、普通気にしないもんね。
ドォオン！！
くっ。
また凄い爆音ね。
「くっ。傷一つつかないだと！？どうなってるんだ」
「いかがいたします？」
「アレを持って来るんだ！！」
「え！？まさか」
「いいから！早く！！」
やはり、あの壁に執着している。
あんなに必死になって、あの向こうに何があるって言うのかしら。
カチッ。
かちっ？
なんですぐ側でそんな音が？
「立て！どこから迷いこんだか知らないが。見たからには無事で帰れると思うなよ！！」
後ろには。
銃を構えた兵士が立っていた。

第4章　7話

「はっ！」
気が付いた時にはすでに手が出ていた。
能力を使い、銃を撃つ間も無いうちに倒れた。
「どうやら警備をしている奴らに見つかっていたみたいだ」
「どうする？あいつら全部やっつける？」
これまでの敵に比べれば雑魚も同然。
数十人いるけど問題にもならない。
「いや。止めておこう。それよりも一旦離れておこう。あそこに何かありそうなのは分かったし」
慎重なのね。
「あいつらが軍隊だから？」
「そうだな。どうして自衛隊がここにいるか分からないが。あいつらがいる理由はなんとなく分かる。何せ空中に浮いている都市だ。軍事利用したくもなる」
「それはいいけど、これからどうするの？」
一旦離れるのはいいけれど。
まだこの都市の構造もよく分かってない。
これまでは、なんとなく怪しい所とか分かったんだけど。
今回はまだそういう所が見つけられない。
唯一怪しそうなのは、あいつらが固まってるし。
それに。
今回は敵と思われる存在もまだ出てない。
ちょっと今回はいつもと違う。
とりあえず私達は離れる。
さて、どうするか。
「土の精霊よ！」
え？

健一が珍しく能力を使ってる。
非科学的な力はあんまり好きじゃないって言ってたのに。
土の精霊と何やら話し込んでる。
「なるほど。どうやらこの都市の中枢はやはりあいつらがいる所らしいね」
「分かるの？」
「ああ。この都市だって地面がある。それならそこから情報を得ればいいんだしね」
ふえー。
なんというか。
健一はあのピラミッドの前と後では全然変わったわね。
かなり積極的になったし。
「んで、どうする？」
「なんとかして、あそこに行きたいな。おそらく美喜子なら何かを見つけられると思うし」
頼られるのも悪くないわね。

第4章　8話

さて、どうしようか。
そう考えていた時。
なにやら騒ぎが起きている。
何？
「うわぁあああ！！」
もの凄い叫び。
尋常じゃないわね。
何が起きたのかしら？
ん？
「なっ！？何、あれ？」
信じられない物を目にした。
それは銀色の球体。
大きさは約2メートルって所かしら。
それが、自動で転がっている。
そして、さっきの彼らと戦っている。
どうなってんの！？
「これまた、未知の技術だな」
健一も感心している。
パンパン！
銃で撃ってるけど、まったく利かない。
もの凄く固いのかしら。
「何にせよ、混乱は起きている。今のうちに行こう！」
「うん！」
今の私達はここの中心に行く事が目的。
無駄な戦いはするべきでは無い。
「でもどうすんの？このまま行ったらあいつらにも、そしてあの球体にも会うけど？」

「僕にいい考えがある。瞬間移動を使うまでもなく、無事に通り抜けれる方法が」
ふむ。
健一は今回の冒険でだいぶ変わったわね。
なんというか、頼もしくなったというか。
ふふっ。
「ん？」
「あっ、なんでもないの！」
まったく。
何を考えてんのよ。
っと。
あいつらが見えて来た。
だけど、私達の事を気にする事無く逃げて行く。
「え？どういう事？」
「そりゃあ、あれに追いかけられてんだ。僕達に構ってる暇は無いだろうね」
そうか。
突然現れた球体。
これに追いかけられていたんだものね。
「んで？どうするの？」
どんどんこっちに向かって来る。
「あいつは地面を自在に動いている。だけど、その地面を動かしてやれば」
え！？
「ノームよ！」
健一が精霊を呼び出す。
そうか！
健一にはこういう手があったんだわ。
球体が私達を避けるように動いている。
いや。

地面が動いているんだわ。
ぐるぐると回ってはいるけれど、まったく動かない。
その肝心の地面を健一が動かしているからだわ。
「これで良し」
健一は今回の冒険で、だいぶ成長してるわ。

第4章　9話

ここがさっきの場所ね。
爆破の後もある。
ここの奥に何かがある。
まずはそれを見つけなきゃ。
えっと。
まるっきり何にも無い、真っ平らな壁が延々続いている所でただぽつんと焦げ跡があるだけ。
なんで確信を持って、ここを爆破しようとしたのかしら？
あれ？
ここ。
焦げ跡からちょっとズレてるけど。
何かある。
ものすっごく小さくて、ぱっと見でそこに何があるか分からないぐらいの。
それぐらい小さなボタンがあった。
「健一。こんなの見つけたけど」
「これはボタンか？良く見つけたな」
元々何かを見つけるのには長けてるとは思ってたけど。
なんか見つけちゃうのよね。
「それにしても。良く何も言わずに押さなかったね」
「もう。私だって反省してんのよ。あのピラミッドの時を」
そう。
全てはあそこから始まった。
私が健一の忠告を無視して、スイッチを押してしまったがために。
私達は今ここにいる。
しかも集めたら元に戻れるという保証も無いままに。
それでも。

私達はこの冒険を続けるしか無い。
そこに何があるのか分からないけれど。
それが、きっと私達の運命なのだから。
「よし押そう」
「うん」
私達は意を決して、ボタンを押す。
ゴゴゴゴ。
すると！
焦げ跡のあった壁だけが上に上がっていく。
あいつら。
やっぱり知ってたんだわ。
あそこから奥にいけれるって。
「さて。何が出てくるか」
「ふん。すでに覚悟は出来てるわよ」

第4章　10話

通路を進む。
ここは明らかに人の手が加わっているわね。
もの凄く綺麗な壁で、まっすぐ続いている。
今の所何も無いようだけど。
何が待ってるのかしら。
ん？
やがて歩くと開けた場所へとたどり着く。
かなり広い。
その中央に、大きな木が立っている。
ある意味、違和感を感じるわね。
「ここが中央？」
「そうだろうね。土の精霊が感じたからにはこれは自然の物なのは間違いない」
なるほどね。
「待って！誰かいる」
健一が止める。
あら。
木に注目が行きすぎて、見落としていたわ。
誰？
「あっ！あいつは！！」
「気づいた？そう、あいつだ」
あいつは、忘れもしない！！
「ん？なんだお前らは！どこから入って来た！？」
くっ私達を覚えて無いっていうの！？
「落ち着け。あの時は小さな子供だ。分からないのも無理は無い。なぁ！ディルス！！」
健一が叫ぶ。

落ち着けって言った本人が興奮してるじゃない。
でも、無理は無い。
あいつは、忘れもしない。
あの事件の首謀者。
思えばその事件がきっかけで、私は空手を習う事にし、さらに健一は科学を始めとして勉強に励むようになった。
その時に、あいつに会ってる。
まさか、ここで会うとは!!
「何故、俺の名前を?」
「あんたは日本にも来た事あるだろう?その時のどれかだとは言っておく」
あの時、悔しい思いをしたものだけど。
まさか、まさか!!
ここで会うなんて!!
「ともかく、ここで会えたのは運命なんだろう。あの時のリベンジをするチャンスをくれるなんて」
確かに。
健一の言う通りだわ。
あの時の悔しい思い。
絶対忘れはしない。
「ともかく、俺の計画の邪魔をすると言うならば、お前らには死んでもらうだけだ」
何をする気?
すると。
手から小さなビー玉みたいのを出す。
あれは?
床に落ちると。
みるみる大きくなる!!
あれは、さっき見たのと同じ物だわ!!
「まずい!さっきは地面があったから出来たけど、今は人工の床だ。

同じ手は使えない」
そっか。
しかもまずい！
複数出して来る！
あれが、あいつの能力なのかしら？

第4章　11話

来る！
健一が能力を使えないのなら。
私がやるしかない！
よーし。
タイミングを合わせて・・・
「はっ！」
拳で玉を弾く！
もちろん。
奴に向かって！！
「なに！？」
当たれ！！
だけどそう上手くはいかない。
玉が小さくなり、奴には当たらない。
そのまま壁まで当たる。
「ほう。それが君の能力かね？」
「さてね。あんたこそ、今のが能力？」
いくら私でも、馬鹿正直に答えるような相手では無い。
だからこそ、私も瞬間移動は使わない。
まだディルスの能力が未知数。
だからこそ、先にこっちの手の内を知らせる訳にはいかない。
「これは能力では無い。俺の武器だ」
武器？
この玉が？
「ところでディルス。何をしにここへ？」
健一が当然の質問をしてくる。
そうだわ。
私達は目的があってここに来ている。

当然、こいつも何か目的があって来ているはず。
そうでなければ、わざわざ地上絵の矢の部分なんて来るはずも無い。
「何。実験だよ。ＤＮＡの実験」
実験？
「これまでも色々やって来てね。ピラミッドの死人に動く力を与えてみたり、無人の街に住むハーピーに繁殖機能を与えてみたり。そうそう、海に沈む街では恐竜に凶暴性を与えてみたりもしたな」
なっ。
なんですって！？
それは。
今まで私達が来ていた所じゃない！！
つまり。
こいつのせいで！！
こいつが、元凶だったのね！！
「なるほど。つまり。お前の能力にはＤＮＡが関係してる訳か」
え？
「どういう意味？健一？」
「簡単さ。普通、そんな簡単にＤＮＡはいじれない。それを実験出来るって事は、少なくともこいつはＤＮＡ関係の能力を持ってるって事だ」
そっか。
当たり前と言えば当たり前ね。
「そして、それはある程度近くにいないと発揮出来ない。おそらく触れるレベルじゃないと無理じゃないかな？そうで無ければとっくに僕達はＤＮＡをいじられてる」
なんと。
健一はそこまで推理してたなんて。

第4章　12話

「そこまでだ！！」
ん？
後ろから現れたのはさっきの兵隊だった。
どうやら、こいつらも隠し通路を見つけたみたいね。
「こいつら、何処から来たんだ！？」
「そいつらは放っておけ。まずはディルスだ！！」
ディルスを囲む。
「おい！何処に財宝があるんだ？ここにあると思ったんだが」
こいつら、財宝が目当てなの？
「くっくっく。お前ら本当に頭が変なのか？」
「なんだと！？」
「だってそうだろ？この街自体が財宝だ。これ以上の財宝はここには無い」
確かに。
それはそうかもしれない。
でも。
こいつは何というか。
”何か”を隠してる気がする。
こいつにとって、この街は財宝では無い。
それは以前、子供の時の体験で分かってる。
もしかして。
こいつは、誘っている！？
「貴様！！」
どんどんディルスに近づいている。
もしかして。
これが狙い！？
「そんなに近づいていいのか？」

ん？
足下に玉が。
あれは！！
さっき、私がはじき飛ばした玉だわ！！
それがどんどん大きくなる！
「うわぁああ！」
慌てて下がる。
そういえば、やつにはあれがあったんだわ。
「お前らを呼んだのは他でもない。ここでの実験材料が君たちだからだ」
なんですって！？
「ぐっ！？」
それが縦横無尽に転がる。
「なっ！！」
当然、彼らはパニックになる。
私達はまるっきり動いていない。
何故なら、この玉は彼らを狙っているから。
なっ！？
突然、ディルスの手が兵士の一人に触れた！
私だから気づいたけど。
あまりにも自然な動きだった。
そして、触れられたらどうなるか。
それを目の当たりにする事になる。
「ぐぁあああ！！」
苦しがっている。
一体どうなってるの！？
なにっ！？
腕が！？
腕が黄金に！？
「どうだ？お前達にも分かるような財宝を手に入れた感想は？」

こいつ。
茶化してる！
「ぐわぁあああ！！腕が・・・腕がぁあ！！」
右腕の肘から先が、完全に金に変わってしまった。
腕の形はそのままに。
これが健一が言っていたＤＮＡを操作する能力！？

第４章　１２話（後書き）

次回更新は６月６日（月）予定です。

第4章　13話

一つ分かった事がある。
それは、あのＤＮＡを操作する能力を発動させるには相手に触らないといけない。
しかも手の平をべったりとくっつけないと無理。
そうでなければ、あんなに至近距離まで近づいて手の平を付けるなんてありえない。
「うぐっ！」
ん？
腕を金に変えられた人が、さらに苦しんでいる。
どうしたというの？
「ぐわぁあああ！！」
え！？
さらに。
金の部分が増えている？
さっきまで肘から先だけだったのに。
もうすでに腕全体が金に。
いや。
もっと全身が金に変わって行く！！
「おやおや。失敗したか。どうもまだ不安定だな」
さらりと言ってる。
こいつ！！
「美喜子、落ち着け」
健一が私の腕をつかんでいる。
「どうして！！」
「僕達の本来の目的はなんだ？」
うっ。
「あいつを倒す事じゃない。僕たちはただ本来の生活を取り戻した

いだけ。違うか？」
確かに。
私達はあのピラミッドの時から見つけた水晶のドクロを集める事。
集めると何が起こるのかは、今でも不明だけど。
でも集めた先に戻る方法がある可能性もある。
それにしても。
こいつは自分の力をただ面白がって使ってるという印象しか見えない。
でも、何故ここに？
いや。
ここだけじゃない。
ピラミッドやストーンヘンジにも来ていると奴は言ってた。
偶然なのか、必然なのか。
私達も同じ所を行っている。
「仕方ない。ここでの実験は終了か」
こいつ。
これまでも罪の無い人達を！

第４章　１４話

「もうここには用は無い。次へ行くか」
こいつ。
「美喜子。行かせてやれ」
小声で健一が言う。
「なんで！？」
信じられない。
健一だって、こいつのせいで悔しい思いをして人生が変わったはずなのに！！
ディルスが行ってしまった。
「何度も言ってるけど、僕たちの目的はなんだ？」
「くっ。水晶のドクロを手に入れる」
「そうだよ。ディルスを倒す事じゃない。確かに二度と無いチャンスかもしれない。それにあいつの目的がなんなのかも知りたい」
やはり健一も悔しいんだわ。
「それに、あいつの能力は未知だ。触れると駄目というのはやばすぎる」
それは、そうかもしれない。
あの玉を動かす能力も詳しい事が分かってない。
奴は武器って言ってたけど、本当かどうかも分からない。
今は小さなビー玉サイズにまでなっている。
混乱をしていた自衛隊達は、私たちを放っておいてディルス達を追いかけている。
あいつらもディルスに滅茶苦茶にされた可愛そうな犠牲者ね。
なにせ、ここに１体。
金の像が立っているから。
「これって治る事あるのかしら」
「さあ。残念ながら僕達は治す術は無い。あいつが治す意志がない

限り。でも無駄だろうね。だってあいつは狂ってるからな」
確かに。
そのせいで、健一は科学の道を歩む事になった。
そう。
ディルスに対抗するために。
私はまったく違う理由だけれども。
それでも、あいつに対抗できるように修行してきた。
「それにここで会ったのが運命なら、あいつを倒すチャンスは必ずやってくる」
「どういう事？」
「だってそうだろう？あいつはまだ目的がある。それはどうやら僕たちの行く先とも何か関係がある。つまり、まだ会うチャンスはあるって事だ」
そこまで考えて、あいつを見逃したって事ね。
「とにかく僕たちは水晶のドクロを手に入れる。あいつを倒すのはそれからでもいい。これはきっと僕たちの運命なんだと思うから」
運命ね。
確かにそうかもしれない。

第4章　15話

ん？
なんか、変な感覚ね。
これは？
「ねぇ、健一。なんかおかしくない？」
「これは。そうか！この空中都市が落下してんだ！！」
え！？
「らっ落下ぁ！？」
落ちてるって事ぉ！？
「まずい！早く逃げなきゃ！！」
こういう時に瞬間移動があって助かったわ。
「逃げる？」
「そうよ！落ちちゃうんでしょう？このままじゃやばいわ！！」
「確かに危険な状況だが。まだ僕たちは逃げる訳にはいかない」
へ？
「忘れたのか？まだ僕たちは水晶のドクロを手に入れてない」
健一・・・
「もし逃げたいというなら。僕は置いて行け。僕はまだやる事がある」
なんというか。
健一はだいぶ変わった。
こんなに男らしかったっけ？
やばい。
もっと健一の事を好きになりそうだわ。
「おそらく、この近くにあるはずなんだ」
「なんで？」
「ここには、この空中都市を浮かしていた物があったはずだ。つまりここが一番中心であり、一番重要な所だ。ならここに大切な物を

置いたほうがいい」
そういや、ここは私が勘で見つけたんだわ。
って事は。
「よし！ここから先は私の役目ね。任せて！！」
よーし。
健一の役に立たなきゃ。
何かを見つけなきゃ。
そこに水晶のドクロがあるはず。
「分かった。それじゃあ、あいつの相手は僕がしよう」
へ？
あいつ？
「ほう。私の気配を感じるとは、さすがだな」
なっ！？
誰かいる！？
突然姿が出てきた。
そいつは。
ディルスの相棒！！
「氷室百合恵！！」
そう。
私は、彼女に対抗する為に空手を習った。
健一がディルスに対抗する為に科学を習ったように。

第4章　16話

なんで彼女がここに!?
ディルスの相棒だと言うのは知ってるけど、なんでディルスと一緒に逃げなかったの?
「美喜子は早く見つけるんだ」
そうだわ。
なんとしても、水晶のドクロを見つけないと。
私の勘からして、この辺りの壁が怪しいんだけど。
「この私と立ち向かうとはな。死ぬつもりか?」
「さあ?とりあえず、時間稼ぎが出来ればいいよ」
気をつけて健一。
そいつは有名な暗殺者。
肉体で殺すとも言われてるほど。
だから、私も肉体で戦える空手を習ったんだから。
「それに、君を倒そうなんて思ってない」
「何?」
「僕たちが探している物を見つければ僕たちの勝ちだ。このまま下手に時間を失って、この空中都市が落下してしまえば僕たちの負け。何せ次の目的地を見失ってしまうんだからね」
そうか。
それで健一はあんなに水晶のドクロを探す事を優先させていたのね。
おそらく、ディルスは全く違う目的であちこち行っている。
それをたまたまか、それとも運命なのか。
同じ道を歩んでいる。
それを、ここで断ち切ろうとしている訳ね。
そして、ディルスはもうここでの目的を果たした。
だから、用済みのこの空中都市を私達もろとも始末しようとしている。

「時間稼ぎか。はたして出来るかな？」
早く！
早く見つけなきゃ！！
ん？
これは。
「健一！！見つけた！」
「さすがだな。ちょっと会話してるだけで、もうこっちの勝ちだ」
「まだだ！！ここで死ねば！！」
氷室が飛びかかる！
「危ない！！」
思わず叫ぶ。
あまりにも早い動き。
常人離れしている！
だけど。
その動きが、健一の前で止まる。
え？
「『シルフ！』あんたの動きは、風の動きで止めてもらった」
さすが！！

第4章　17話

「美喜子！開けて飛び込め！」
私はうなずく。
健一の能力のパワーはそれほど強くない。
おそらく彼女を止めるほど強くしてるって事は、逆に効果時間が短いんだわ。
私の能力がいい例。
私はすかさずボタンを押す。
開いた！
そのまま、中へと飛び込む。
ふと振り返ると。
健一も走ってる。
ん？
こっちに飛び込むついでに、スイッチを踏んでる！
閉めるつもりね。
「『土の精霊よ！固めろ！！』」
へ？
健一はそのまま、私の側へと飛び込んだ。
「どういう事？ここの床は自然のものじゃないから使えないって」
「ああ。だけど僕の靴の裏にある泥は自然の物だろう？あのスイッチを覆い隠すには十分だ」
なんと。
とんでもない事を思いつくわね。
精霊を操る事が出来るというこの能力。
とんでもなく便利ね。
「さて。とにかく水晶のドクロを早く見つけよう。こうしている間にも落下はしているんだから」
そうだわ！

私は懐中電灯を点ける。
ここは電気も無く真っ暗。
中は。
「うわぁ」
これは。
金銀財宝の山だわ。
持って帰れば、それこそ大金持ちになれるほどの量。
「水晶のドクロは何処だ？」
それに関心を示さない人がここに一名。
いえ。
そうよ。
私達の目的はあくまで水晶のドクロ。
この財宝を求めて来たんじゃない。
えっと。
何処にあるのかな？
ん？
あっちの方にありそうな。
あっ！！
「見つけた！！」
今度こそ、正真正銘。
本物の水晶のドクロだわ。
「さすが美喜子だな。よし、早く帰ろう」
「そうね。この都市も落下しちゃうし。あれ？あいつらはどうするの？」
あいつらとは、もちろんさっき会った自衛隊の事。
「表にはまだ氷室もある。ここは僕たちだけで帰るんだ。それにあいつらだって独自の方法で脱出方法があるだろう。そうで無ければ、空中に浮かんだ都市に行こうなんて思わない」
そういうもんかしら。
「氷室百合恵はどうするつもりかしら？」

「さあ？パラシュートでもあるんじゃないか？ディルスを置いて残るんだ。それこそ独自の脱出方法でもあるんだろう」
まぁ、それはそうかもしれないわね。
「こっちは自分達だけで精一杯だ。非常と言われようがあっちはあっちでやってもらうしかない」
よし。
帰りましょう。

第４章　１７話（後書き）

次回更新は７月２５日（月）予定です。

第5章　モヘンジョ・ダロ

私は、正直恐かったです。
あの大きな生き物。
恐竜と呼ばれる太古の生き物と遭遇したあの戦い。
水晶のドクロを集める事が、妹でもある葛葉を救う道だと思って必死になりましたが。
それでも。
私の覚悟は美喜子さん達に比べると、足らない物でした。
彼女は凄い。
そう、山本さんも。
美喜子さんは、普段も恐い物知らずな所もありましたけれど。
山本さんは、失礼ながら気弱な面があると勝手に思ってました。
しかし。
勇敢にも、あの恐竜に立ち向かい。
そして、次の冒険にも行く事が出来ている。
すでに3つの冒険をくぐり抜けて来た事で、度胸がついたかのように。
それに比べて、私は自分の能力を知ってるくせに。
それを十分に使う事も無く暮らしている。
元の平和で暖かな生活を取り戻す為には、少々の危険をもくぐり抜けないといけないというのに。
私はどうすればいいんでしょう。
ただ、美喜子さん達が危険な冒険を乗り越えて。
見つけた水晶のドクロを鑑定すればいいだけ？
はたして、それであの子の姉と言えるというの？
未だに帰らない葛葉。
それは、美喜子さんの妹でもある葉子さんも同じだと聞いています。
しかし、美喜子さんは妹の事をそれほど心配はしていない模様。

どうも、同じような危険な冒険をしていると考えているようです。
となると。
妹の葛葉も同じ境遇と考えてもいいでしょう。
そうでなければ、何日も帰らないなんてありえない。
しかも、何の連絡も無しに。
あの子まで危険な冒険をしているなんて。
そう思うと、私は一体何をしているんだろうという気にもなる。
私はあの子の姉じゃないの？
あの子が危険な冒険をしているというのに。
私は平和に学校に登校していいのか。
美喜子さん達と共に冒険に行くべきだと思うのに。
私には決定的に覚悟が足らない。
恐いと思う気持ちの方が上回っている。
どうすれば。
「理恵子？」
「あっ！美喜子さん」
彼女は、普段通り登校して来た。
冒険を優先すると思っていたのに。
「放課後ちょっといい？」
「はい？何でしょう？」
私に用？

第5章　2話

放課後に図書室に来て欲しい。
その美喜子さんの言葉通りに、私は来た。
私に一体何の用なのかしら？
図書室には、すでに先客が一人いました。
山本健一さん。
彼も普段通り、登校している模様。
「美喜子さんは？」
「荷物を取りに行ってるよ」
荷物？
もしかして。
「新たな水晶のドクロ？」
「そうだ」
また、私の知らない間に冒険をしているとは。
「よくそこまでやれますわね」
「そうかもね。まずは、美喜子が止めても無駄な性格しているし」
意志が強いってのは知ってましたけど。
凄い方です。
「それに、僕たちには子供の頃からの運命があるからね。どうやらあのピラミッドの時からその運命が再び動き始めたようだ」
運命？
「なんなのです？運命って。まだ私達のような年齢でそんな言葉が出るなんて」
まだ社会にも出た事も無いのに。
よほどの事があったのかしら。
「林道さんも知ってると思う。『茨城県原子力爆破事件』を」
「え！！」
まさか！！

あの陰惨な事件。
誰もが知っている。
確か、生存者が二人だけいたはずですが。
「まさか、あの唯一の生存者!?」
「思えば・・・あれが僕たちの運命の始まりだった気がする」
まだ子供だったゆえに警察がマスコミに伏せたから、普通の生活が出来ていたとは思っていましたが。
まさか、美喜子さんと山本さんがあの唯一の生存者だったとは。
「僕たちはあの事件から、特に大切に育てられて来た。その中でいくつかの出来事もあったけどね」
ふむ。
「大きくなるにつれ、あの事件も忘れて来たけれど、まさかまたそれを思い出す事になるとは」
そういえば。
確か、あの事件の首謀者は。
「あっ!」
思わず叫んでしまった。
慌てて口を手でふさぐ。
「?どうしたんだい?」
「確か、あの事件の首謀者って!!」
「ああ。ディルス・ダラスと氷室百合恵の二人だけど?」
そうだわ。
一時期マスコミで大騒ぎになっていたはず。
当時は私も子供でしたので、細かい所を忘れておりましたが。
そしてディルスと言えば。
私もその名前は他人事では無かったはず。
「もしかして、林道さんも知ってるのかい?ディルスと氷室を」
「知ってるなんてものではありません」
まさか。
この二人が出てくるなんて。

第5章　3話

「もしもーし、お邪魔かしら？私」
美喜子さんが私の背後から現れた。
「お邪魔って何だよ。それよりも、林道さんもディルスの名前を知ってるみたいなんだ」
「へ？ディルスを！？」
私はうなずく。
「あいつこそ、葛葉の両親を殺した人物。あまりにも憎すぎる相手ですわ」
「葛葉ちゃんの両親って、どういう事？理恵子の親父さんはついこの前も会った気がするけど」
「って事は、葛葉は養子って事かい？」
山本さんは察しがいいですわね。
「その通りです。葛葉は違う両親の元で生まれ、育っていました。それがディルスに殺されて。さらには預けられた親戚の所でも酷い仕打ちを。あの子の両親が殺される事には私の両親が関わりを持っていたので、あまりにも可愛そうなので私が引き取ったのです」
ですから、血は繋がっていない。
「へー。そうは見えないわね。滅茶苦茶仲の良い姉妹にしか見えないのに」
「そうですわね。あの子が私を慕ってくれるおかげだとも言えます」
だからこそ、葛葉には幸せになって欲しいのに。
その葛葉にも、能力が発動してしまった。
あの、トトの書のせいで。
それでも、葛葉は気にする事無く過ごしていた。
それを見て、私も気にする事を止めましたが。
「だからこそ、葛葉も危険な冒険に巻き込まれてると思うと、とても辛いんです」

私のせいで。
「でもここでディルスという名前を聞いて、私は思い出しました。私が何のために不思議な道具を集めていたかを」
「って事はだ。林道さんもディルスを倒したいと？」
黙ってうなずく。
そもそもは、あのディルスのせいで葛葉の幸せが滅茶苦茶になってしまった。
今となっては、何故葛葉の両親を狙ったかは定かではないけれど。
あの子の姉として、ディルスを許す訳にはいきません。
「って事だ。どうする？美喜子」
「どうするも、それを聞いちゃ仕方ないじゃない」
？どういう事？
「実はね」
美喜子さんが口を開く。
「私達の冒険と、ディルスの目的は何か繋がりがあるのよ」
「え！？ディルスと！？」
まさか！！
お二人にも！？。
「まだ奴の目的は分かってないけど。少なくとも今まで私達が行った先には、ディルスも行ってたみたいなのよ。奴には奴の目的があるみたいだけど。でも、この水晶のドクロを集めて行けば最終的にあいつと戦えるかもしれない」
「まだ謎は多いけどね。あいつにも能力があるらしいのは分かってるけど、その能力もまだ全部分かってる訳では無い。それにこの水晶のドクロを集めると何があるのか。その肝心な部分も分かっていない」
なるほど。
何故かは知らないけれど。
水晶のドクロがある先には、ディルスも現れる。
そして、その最終目的はきっと良くない事が待っている。

あのディルスがわざわざ動く理由なんて、そういう事でしょうね。
「美喜子さん、山本さん。改めて言います。私を一緒に連れて行ってください！！」
今度こそ、勇気を出さなくては。
あの子の姉である為に。

第5章　4話

そういえば。
「先ほどから何を調べているんですか？」
山本さんは本を開いて調べている。
「あぁ。今回見つけたドクロに描いてあった図形を調べてるんだ。これが次の目的地なのは間違い無いんだけど。どこか分からなくて」
ふむ。
確かに、意味不明な建物の図形ですわね。
でも、何処かで見た事あるような？
えっと確か、有名な場所だったはず。
「ほら、まずはこれを鑑定してもらえる？まぁ本物であるのは間違い無いとは思うけど」
美喜子さんが水晶のドクロを出して来る。
これが今回手にいれた水晶のドクロですね。
なるほど。
触れると、確かに本物。
そして。
図形が頭の中に飛び込んで来る。
これが今、山本さんが調べている図形なのね。
あれ？
これってもしかして。
「この図形。もしかしてモヘンジョ・ダロの上部から見た図形ではありませんか？」
「え！？」
山本さんは慌てて本を調べる。
「本当だ！！これは、そっくりというか。モヘンジョ・ダロそのものじゃないか！！」
「良く分かったわね」

美喜子さんは感心している。
「ほら。私は情報が直接脳に飛び込んで来るから。かなり強烈に覚えいられるんですよ。しかも、こういう古代文化を私は得意としていますから」
まるで、パズルのピースが合うように情報が合う瞬間を体験しましたわよ。
「それじゃ、次はモヘンジョ・ダロね！」
「美喜子。かなり問題があるよ。次の目的地は」
確かに。
「へ？どんな問題？」
どうやら、美喜子さんは分かっていない様子。
「モヘンジョ・ダロがある場所はパキスタン。つまり未だに戦争が行われている国だ。モヘンジョ・ダロの周辺はそれほど危険だとは思わないけれど」
それでも、行かなければならない場所。
二人の態度を見ているとそう思っています。
色々言ってはいても、二人とも行く前提で話が進んでいる。
これはきっと、今までも二人が当たり前のようにやっていたんでしょうね。
どんな危険な所でも行く覚悟。
これこそが、彼女達の強さの秘訣なんでしょうね。
私も、この覚悟をしなければならない。
葛葉の姉として。

第5章　4話（後書き）

次回更新は8月22日（月）予定です。

第5章　5話

美喜子さんの瞬間移動でやって来た。
改めて体験する能力ですけれど、かなり便利ですわね。
「さて、さっそく中を調べなきゃ」
早くも準備を進めている。
この辺りの手際の良さが、これまでの冒険の数を知らしめている。
ライトを点けて中へと入る。
さすがに、周りが戦争をしているだけあって。
中には人の気配は無い。
もっとも、ここへ好きこのんで行く旅行者はそれほどいない。
それはこの国の事情もありますけれど。
この場所もかなり暑い所にあり、行くだけでも困難という事もあります。
ふむ。
「とりあえず、一番奥へと行けばいいのね」
「たぶんね。これまでの経験で、一番重要な所にヒントはあるはずだし」
なるほど。
本格的に冒険を共にする私としては、色々勉強になる事がある。
何の迷いも無く、奥へと進む。
「へ？」
不意に、美喜子さんが声を出す。
何？
その目線の先には。
蜘蛛型ロボットが動いていた。
何故ここに？
ロボットが私達に気づく。
すると。

早い動きでこちらに近づいて来る！
これは。
飛びかかってくる！！
「ふん！」
美喜子さんが、凄まじいスピードでそれを粉砕する。
あらら。
さすがは美喜子さんという所ですかね。
こういう勝ち気な所は美喜子さんの長所。
それにしても。
「何故ここにロボットが？」
生物と違ってロボットは自然発生などしない。
誰かがここに設置しない限り。
つまり。
「誰かいるって事か。しかもディルスじゃないな」
違う？
「そうね。あいつだったら今のは本物の蜘蛛にしてるわよね。巨大化でもさせて」
そんなとんでも無い事をする相手だったなんて。
これは、改めて覚悟を決めないといけないですわね。
「さて、誰がいるのやら」

第5章　6話

私は彼女の強さの秘訣が何か分かった気がする。
それは、今みたいに瞬時に状況に対応する事。
何も力が強いとか、そういう事では無い。
それは私には無い力。
いえ。
私もそれを備えなければならない。
ディルスと戦うために。
「さて、また来たみたいね」
ふと見ると。
前方から何かがやってくる。
これは！？
「コウモリ！？」
姿こそコウモリそっくり。
だけど、これも機械の体をしている。
「てぇい！！」
あっと言う間に、美喜子さんが倒す。
洞窟にコウモリはつきものだとは思ってましたが。
なぜ機械が？
「もしかして、ここにいるのは生物を機械に変える能力者なのかな？」
生物を機械に？
そうだとすると。
蜘蛛やコウモリというのは、洞窟にいても不思議ではない生き物。
十分ありえる説ですわね。
「って事は、ますますディルスと氷室の二人じゃない可能性が高いわね」
「そうだな。今回、こんな事は初めてだ」

なるほど。
未知なる敵と言った所でしょうか。
さらに私達は奥へと進む。
「なっ！！」
美喜子さんが絶句している。
そう。
そこに現れたのは。
巨大な牛のような姿をした。
ロボットだった。
これもまた機械。
しかし、唯一違うのはその大きさ。
高さだけでも、４～５メートルぐらいはありそう。
全長にするとどれくらいになるか。
「これはまた、とんでもない敵ね」
美喜子さんはすでに戦闘モードに入ってる。
よし、ここは私も。
手からほうきを出す。
これが私の能力。
そして、このほうきも普通のほうきでは無い。
以前、恐竜と戦った時にも使っていた。
切るほうき。

第5章　6話（後書き）

次回更新は9月5日（月）予定です。

第5章　7話

「はっ！」
美喜子さんの攻撃でも破壊出来ない。
かなり頑丈に出来ているみたいですね。
普通の鉄では無いみたい。
それにしても、ここに牛なんて。
無言でこちらをにらみつける。
これに負けてはいられない。
こんな程度で負けてては、先が思いやられる。
ほうきを持つ手にも力が入る。
「えいっ！」
ほうきが体に当たる！
ガキィン！
え？
弾かれた！？
このほうきが弾かれるなんて。
これは相当固い材質で出来てますね。
さて、どうすれば。
「どうする？私のパワーでも効かないなんて」
美喜子さんも困ってますわね。
機械の牛はゆっくりとこちらに近づいて来ます。
「よし。効くかどうか分からないがやってみたい事がある」
山本さん？
彼は普段とても頼りなく見えるのに。
こういう時は、とても格好良く見える。
「『火の精霊よ！』」
精霊を呼び出す。
そういえば、これが彼の能力でしたね。

でも、それほど力は無かったはず。
どうするつもりなのかしら。
「いくぞ!!『ファイヤー・レーザー』!!」
機械の牛を火で攻撃する。
一体何を?
美喜子さんや私の攻撃でも利かないのに、山本さんの精霊の力で効くとは思えないのですが。
それでも構わずに何発も攻撃している。
「どういうつもりなんでしょうか?」
ふと思った疑問を美喜子さんに投げかける。
「さあ?でもあいつに任せておけばいいのよ」
自信ありげに答える。
つまり、美喜子さんはそれほど山本さんを信頼しているという証拠。
これまでの冒険で、いざという時に山本さんが活躍しているのいうのが分かる。
という事は、この攻撃も何らかの計算の上でやっている事になる。
「そろそろ頃合いかな?よし次は『水の精霊よ!」』
水?
「あっ!!」
そういう事ね。
「?どうしたの?」
「物質というのは、熱く熱した状態で急激に冷やされると脆くなるんですよ。特に金属なんかはその傾向が強いんです」
なるほど。
これを狙っていたのね。
「いけ!『ウォーター・レーザー!』」
水が襲いかかる。
その瞬間。
ビキ!
何やら、ひびが入ったような音がする。

やはり。
温度差で耐久性が脆くなったんですわ。
「今だ！今なら簡単にやっつけられる」
「よーし！」
美喜子さんが走る！
まさに待っていましたと言わんばかりに。
「てぇい！！」
その美喜子さんの一撃で。
牛は粉々に砕け散った。

第5章　7話（後書き）

次回更新は9月12日（月）予定です。

第5章　8話

さて。
先へと進みましょう。
それにしても。
この機械。
一体何の素材で出来てるんでしょうね？
少し気になります。
そっと手を伸ばした。
その瞬間。
私の腕を山本さんがつかんだ。
「え！？」
「止めておいた方がいい。何か嫌な予感がする」
嫌な予感？
なんだか良く分からないですけれど。
素直に止めた方がいいかも。
え？
今。
微かに動いたような？
「美喜子さん！山本さん！」
二人の名前を呼ぶ。
そう。
今、破壊したはずの牛が。
再生されて、また再び動こうとしている。
「うげっ！！再生してるぅ！？」
どういう事？
「自己修復能力！？またとんでもない機能が。あれ？」
？
山本さんが何やら考え込む。

「なぁ、美喜子。これって」
「ええ。前に戦った恐竜を思い出すわね」
あっ！
そうですわ。
私が初めて戦った相手。
確かに、あの恐竜も傷が治ってました。
「この頑丈さに再生能力か。まいったな」
完全に元の状態に戻っている。
そして、私達をにらむ。
やはり、怒っているみたいですわね。
どうすれば？
『理恵子、理恵子』
え！？
何？
この、直接頭に響く声は？
『今こそ、真の力を発揮する時なのです』
真の力？
それってもしかして。
私はほうきを見る。
まさか、このほうきから声が聞こえてくるなんて。
そう。
これには威力が高すぎて、普段は出していない力がある。
それでも、武器として使う分には十分過ぎるほどの力があるのですが。
それを使う時？
でも。
正直、恐い。
あまりの威力の高さに。
このほうきは”切る”事に特化している。
その気になれば、切れない物が無いほどに。

それを使えという事なのね

第5章　9話

「私に任せてください」
このほうきの真の力を使う時。
それが来た。
あまり何回も使いたく無いけれど。
今はそんな事を言っている場合では無い。
「林道さん。狙うなら頭を狙った方がいい」
「頭？」
「ああ。あれは元々生物が機械になっているんだ。だから頭か心臓を狙えばさすがに復活する事も無いだろう。だが心臓は何か危険な気がする」
なるほど。
ここは素直に山本さんの助言に従う事にしましょう。
精神を集中して。
一気に解放！
「はっ！」
すると。
頭の部分が真っ二つになる。
そして、そのまま崩れ落ちる。
「やった！！凄いじゃん！」
ふぅ。
「にして、こんなに凄い威力あるなら。なんで最初から使わないの？」
それは当然の質問でしょうね。
私が口を開こうとする。
「あれ？そう言えば林道さん、髪の毛が短くなってないかい？」
どうやら、山本さんが気づいたようね。
「あれ？ホントだ」

「これが、今の力の代償なんです。一度使う度に髪の毛が5センチほど消滅してしまうんですよ」
ですから、これはあまり使いたくない。
「消滅！？」
「はい。私の能力で鑑定していますから。間違いありません」
そして、これを持っているもう一つの理由。
それは。
「これは、アーティファクト・ウェポンと言われる神の作った武器なのです。ですからそういう代償もあるんですよ。」
「神の作った！？」
「それを何故林道さんが？」
そう。
これはただのほうきでは無い。
「これは、アイテムが持ち主を選ぶんですよ。そして、その人の所へとやってくる。おそらく、私の所に来たのは運命というものなんでしょうね」
私も、初めてこれに触れた時は驚いた。
とてつもなく凄い力が込められている。
それは人が使うにはあまりにも強すぎる力。
ですから私は、普段は力を抑えて使っている。
それでも、普通に戦う分には十分過ぎるくらい。
元々私は戦うつもりは無かったんですが。
それでも、何度か使うはめになった事はある。
ですから、将来このほうきと付き合うためにも。
私は髪を伸ばす必要があった。

第5章　10話

無事に機械の牛も退治して、やっと奥へと進む。
少々手間取りましたが、この奥には何が。
「ん？どうやら、一番奥のようね」
かなり広い部屋。
とりあえず、何も無さそうな感じ。
ただ。
その部屋に、一人の少女がいるだけ。
この中に入って、初めて会う機械じゃない存在。
それだけに、みんなに緊張が走る。
そう。
彼女があの機械を作った張本人と見て間違い無いから。
「あら。よくここまで来れましたわね」
振り返ったその姿は。
あら。
どこかで見た事あるような。
「そこにいるのは、もしかしてリンドウ？」
あっ！
「あなたはレンド様！！」
「？お知り合い？」
「はい。私の鑑定能力は各国のトップの方々にも重宝されていますので。彼女もその一人なんです」
まさか、ここで会うなんて。
「ふーん、って、国のトップぅ！？」
「はい。このパキスタンの大統領、ムシュラフ大統領の娘さんです」
どうして、護衛も無しに一人でここに。
「ふふっ。この前来た客人がね。面白い物を見せてくれたんですよ」
「面白い物？」

それは一体？
「何やら、小さな宝石箱のような物でしたけど。それを開けた途端に、私にこのような素晴らしい力が」
そう言うと、壁の絵に手を触れる。
するとその絵が実体化した。
しかも機械の体で。
「もしかしてそれって、オロチ・システム！？」
「よくご存じで。さすが、考古学に詳しいリンドウ」
「ちょっと・・・話が見えないんだけど」
美喜子さんが話に入る。
「そうですね。何処から話せば良いのやら」
「単刀直入に。そのオロチ・システムって何！？」
オロチ・システムそれは。
「日本の古代文献の中にヤマタノオロチって名前があるのはご存じですか？」
「へ？あぁ、確か八つの頭の龍が暴れて、何かの英雄が倒したって話し？」
「ちなみに、英雄の名前はスサノオノミコトだけどね」
ぽつりと山本さんが加える。
「実はあれは、本当は龍ではなく八つの邪悪なる力が封じられた箱だという説があるんです」
「何それ！？」
美喜子さんが驚くのも無理は無い。
これはあまり知られていない話。
私のように、考古学を詳しく調べていない限りは耳にすらしないほどの話。

第5章　11話

ヤマタノオロチ。
その真実は、実は西洋のパンドラの箱のように開けてはならない8つの邪悪なる力が封じられた箱。
その名はオロチ・システム。
「一体、どなたが？」
「ディルスという客人だよ」
え!?
ディルス!?
何故、彼が？
「なるほど。ようやくあいつの目的が見えて来た」
「ん？どういう事？健一」
え？
山本さんは、今ので分かるというの？
「ディルスだよ。空中都市の時に会った時から疑問に思ってたんだ。あいつの本当の目的をな」
「そういえば、あの時は違う話ではぐらかしてたわね」
そういえば、お二人は会っていたんですものね。
「あいつの真の目的は、そのオロチ・システムとやらの完成だ。おそらくまだ全部は使い切れていないんだろう」
え？
「それは何故？」
持っているのなら、その全部の力を使うのが普通なはずなのに。
「何故なら、あいつはそれを持ってあちこち移動している。たぶんオロチ・システムはまだ完璧じゃないんだろう。だからそれを完璧にするために必要なのを集めているんだ。そうじゃなきゃ、あいつ自ら動くって事は無い」
それほど重要な事という訳なんですのね。

「もしかして、その必要な物がこれまで通って来た所にあるって訳？」
「たぶん。僕たちが水晶のドクロを集めてるように、あいつも何かを探して来ているんだ」
それこそが、ディルスの真の目的。
「そう考えると、あの事故から全てが始まっていた訳だ。僕たちがあの事故から始まったように」
「へ？なんで？」
「僕は知っている。あの原子力発電所は表の顔。裏の顔はオロチ・システムの研究所だって事をね」
え？
「えぇーーー！！」
まさか。
あの日本中を騒がした原発事故。
その裏の顔があったなんて。
「ちょっと待ってよ。だったら何で今頃？あれは私達がそれこそ物心ついた頃ぐらいじゃない！あれから何年経ってんのよ！？」
「それはあいつらに聞かないと分からないが。おそらくは最初は必要な物が何か分からなかったんじゃないか？何せ古代の物だ。すぐに動くとでも思ったんじゃないかな」
確かに、聞いてみないと分からない。
しかし。
ディルスがオロチ・システムを持っているというのなら。
葛葉の両親を狙った理由も分かる。
あの子の両親は。
オロチ・システムの研究チームの中でも一番の重要人物。
真方夫妻。
オロチ・システムを隠すために原子力発電所を破壊したというのなら。
葛葉の両親を狙うのも当然。

どうやら、ここで美喜子さん達と葛葉の事が繋がったようですわ。
「あの、もういいかしら？」
あっ！レンド様。
すっかり、こちらで盛り上がってしまいましたわ。

第5章　11話（後書き）

次回更新は10月17日（月）予定です。

第5章　13話

「とにかく。私は素晴らしい力を手に入れたのよ！！」
彼女の言う事が本当ならば。
ディルスはとんでもない物を持っている事になる。
「それは分かった。ところでここにクリスタルはあるのか？」
「クリスタル？いや。ここには何も無い」
ふむ。
ここにあるはずなのに。
違う所にあるのかしら。
「そうか。邪魔したな」
え？
「さあ、行こう」
「いいんですか？」
彼女はそのままにしておくつもりみたい。
「いいんだ。彼女を守る力があるというのなら、別に僕たちがどうこうする必要は無い」
確かに、あんな凄い力があるのなら護衛が必要無いとは思いますが。
それにしても。
「やけにあっさりと引くんですね」
「僕たちの目的は水晶のドクロだ。だからそれ以外の事はついでの事になる」
これはまた。
山本さんって。
目的以外の事は興味が無いというか。
他の事は関与しようともしないというか。
「それでも、彼女は私にとって見知らぬ仲ではありません」
「そこまで言うなら、林道さんがどうにかするんだ。僕は彼女をどうこうする気は無い」

あっさりと断られる。
どうにかって。
まず、なんとしても能力を消してあげたい。
この能力はあってはならないもの。
強すぎる力は得てして人を不幸にしてしまう。
それは十分に分かっている。
「あれがディルスのオロチ・システムの力でなってしまったというならば、どうにか出来るアイテムも何処かにあるんだろう」
「もしかして。その為に水晶のドクロを？」
「確証は無いけどね」
まさか。
水晶のドクロを集めても、能力にたどり着くとは思えない。
でも。
確かに、水晶のドクロを全部集めたという伝説は残っていない。
あくまで噂話があるというだけ。
私もその真実は分かってはいない。
「ディルスと戦う運命にある僕たちの前に出て来たという事は、少なくともオロチ・システムに対抗出来る何かがあるに違いないんだ」
なるほど。
そう考えると、美喜子さん達の前に出てきたというのも運命。
先になにがあるのか分かりませんが。
きっと、それが一番の近道。
「なぁ。ここにはクリスタルは無いが、我が家には財宝がたくさんあって。その中にはクリスタルがいくつがある」
突然、レンド様が口を開く。
「いえ。ただのクリスタルでは無いんです。人間の頭部の骨の形をしている物で無ければ」
「頭部の骨？それもあったはずだ」
なんですって！？
「珍しい物だからな。覚えている」

「すいません！それ、見せてもらえませんか！？」

第5章　13話（後書き）

次回更新は10月24日（月）予定です。

第5章　13話

レンド様のところに水晶のドクロがあるかもしれない。
私達は早速向かうべく、モヘンジョ・ダロを出る。
しかし、そこに待っていたのは。
一人の女性だった。
出口に出たとたんに立ちふさがるように立っている。
「！！氷室！！」
美喜子さんが叫ぶ。
どうやら、知っている方のようですね。
しかも、この感じからするに少なくとも味方では無い模様。
「何故ここに？」
「簡単な事だ。その娘がお前達と共に出てくるかの見張りをしていた」
見張り？
「林道さん。この人はディルスの片腕的存在ともいえる人物で、暗殺者としても有名な氷室百合恵だ」
まさか！
その名前は私も一度は聞いた事はあります。
裏社会の中では有名な方。
それでも。
まさか実在するとは。
しかも、ディルスの片腕的存在ですって！？
「そして、もし無事にお前達が出てくるようであれば始末するように言われている」
始末！？
「ふん！とうとうあいつも私達を邪魔だと思うようになって来た訳ね！！」
「いや。ディルス様が邪魔だと思ったのでは無い。私がそう思って

いるだけの事」
彼女が？
「基本的にディルス様はお前達など放っておいてもいいと思ってはいるが、私はそうは思わない。特にそこの男」
え？
山本さん！？
「おまえは危険な感じがする。前回会った時もそうだが、とてつもない力を秘めている気がする」
山本さんが危険ですって？
美喜子さんよりも？
私の個人的な感想ですが。
能力という意味では、美喜子さんの方が強い気がします。
「それで、どうやって僕たちを始末する気かな？」
「まだ私の力を出すべきでは無い。でも、これなら確実にお前達は死ぬ」
え？
突然、地面が揺れる。
地震！？
まさか、これが彼女の能力！？
「なっ！！」
美喜子さんが驚く。
あれは！？
地面が開いて、そこからミサイルが発射される。
あれは一体！？
「まさかあれは！！」
レンド様？
「そう。ここに配置されていた核ミサイルだ」
核！？
「それをここに落とすように設定してもらった。お前達の旅はここで終わる」

なんて事を！！

第5章　13話（後書き）

次回更新は10月31日（月）予定です。

第5章　14話

氷室は私達を置いて、どこかへと行こうとしている。
「くっ！待ちなさい！！」
「待つのは美喜子の方だ。まずはあれをなんとかしないといけない」
確かに。
こうしている間にも核ミサイルはどんどんと上空へと飛んでいく。
「でも、どうやってここへ？」
そう。
どこか遠くへ落とすというならともかく。
わざわざ打ち上げて、ここへ落とすなんて。
「おそらく、あのミサイルの先端に核があるんだろう。だいたい核ミサイルってのはそういう構造になってるもんだ。そしてその先端を地面にぶつけて、その衝撃で核のエネルギーが爆発するという仕組み。その為の必要な高度まで上がりきったら急激に角度を変えてここに落とすんだろう」
つまりは、今はその猶予の時間。
それまでになんとかしなければならない。
どうすれば。
あっ！
「ねぇ。美喜子さんの瞬間移動でなんとか出来ません？」
美喜子さんの瞬間移動はかなり便利。
こういう時も役に立つはず。
「いや。それがそうもいかない」
「え？」
どういう事？
「美喜子の瞬間移動は一日3回が限度だ。それ以上は使う事が出来ない。そして、今日ここへ来る時にすでに1回使っている」
そうなると。

まずはあのミサイルに追いつくのに1回。
そして、あのミサイルを安全な所に飛ばすのに1回。
確かに戻って来る分が無い。
「しかも、物を飛ばす時は美喜子も一緒に飛ばないといけない。そうなると、ますます瞬間移動には頼れない」
そうか。
核ミサイルを安全な所に飛ばしたとしても。
今度は美喜子さん自身が危険になるという。
どうすれば。
こうしている間にも、どんどんと上空へと消えていく。
「ん?待てよ。核ミサイルとはいえ、あれはジェット噴射だよな?」
「え?えぇ、ロケットと同じ、燃料を燃やしてその勢いで上げるものですから」
「よし!それならなんとかなる!!」
えぇ!?
一体何を?

第5章　15話

山本さんはロケットの方を見上げる。
一体何をするつもりなのかしら？
「いくぞ『火の精霊よ！！』」
あっ！
そういう事ね！！
「？どういう事？」
美喜子さんが聞いて来る。
「つまりですね。ロケットというのは燃料を噴射させて、その勢いで飛ばしているんです。ですから、その方向を決めるのはその下に付いている噴射口なのですが」
「うんうん」
「山本さんは、その噴射そのものをコントロールするつもりなんです。いくら噴射口が違う向きを向いたとしても噴射自体がずっと真下へと向いていたら」
「あっ、そうか。燃料が爆発するには火がいるもんね」
そういう事。
山本さんは、その火をコントロールするつもりなんだわ。
すると。
ロケットはいつまでも落下する事なく、ずっと上空を飛んでいる。
やがて、その姿は見えなくなってしまった。
「大丈夫ですか？」
「ああ。僕の能力はパワーは弱いけど、その代わり遠距離まで使えるからね。まだいける」
かなり慎重ですわね。
でも、その慎重さのおかげで助かっている部分があるのですが。
「？もう平気なのか？」
レンド様が聞く。

「うん。もう大丈夫だ。大気圏外へと飛ばされた。もう燃料も残ってない。あれは落下する事は無い」
本当に。
山本さんがいてくれて助かりましたわ。
「やった！なんだか分からないけど。ありがとう！！」
それにしても。
氷室という娘。
私達を殺すために、核ミサイルまで使うなんて。
「ねぇ。何かお礼がしたい。核から助けてくれるなんて思っていなかったし」
「そうだな。水晶のドクロがあるって言ってただろ？もし、それが本物ならそれを貰いたいんだが」
「？そんなんでいいの？」
「ああ」
山本さんは、欲とは縁が無いみたいね。
「ま、いつもの事よ」

第5章　15話（後書き）

次回更新は11月14日（月）予定です。

第6章　山本健一の死亡

なんとか今回も無事に帰れたか。
僕の能力がある程度応用が利いたのが幸いだった。
さて。
今回の水晶のドクロに書かれていた文字で次を見つけないと。
今回書かれていたのは。
「２０５７」
これだけ。
毎回毎回。
抽象的というか。
何を意味しているのかが分かりづらい。
美喜子は僕に期待しているし。
なんとか次の目的地を見つけないと。
そんな事を教室で考えていると。
「美喜子さん！山本さん！大変です！！」
ん？
林道さん？
珍しいな。
「一体どうしたんだ？」
「あっ、山本さん。まずはこれを見て下さい。
そう言って一枚の紙を見せる。
これは英語じゃないか。
何だ？
マチュ・ピチュにてオーパーツ発掘大会を行うだって！！
「これは！？」
「こんな事は恐らく初めての事です。もしかしたらディルスの仕業かも」
こんな大がかりな事までするなんて。

ん?待てよ。
確かマチュ・ピチュは。
「山本さん?」
「やっぱり!マチュ・ピチュは標高２０５７メートルだ。つまり、次の目的地でもある!」
ここを指定したのは、はたして偶然と言えるだろうか。
いや。
ここまでの偶然が重なり合う事はまず無い。
たぶん分かってるんだ。
これまで放置していた僕達の行動を、ここに来て本格的に妨害しに来たんだ。
これは危機感を持った方がいい。
これでもし万が一他人に取られる事になったら。
僕達はディルスを追いつめる事が出来なくなる。
あの水晶のドクロは、まず間違いなくディルスを追いつめる材料になるはずだ。
そうで無ければあいつらが出てくる訳が無い。
「これは、大変な事になって来ましたね」

第6章　山本健一の死亡（後書き）

次回更新は11月21日（月）更新予定です。

第6章　2話

マチュ・ピチュ。
それは世界遺産にも登録されていて、日本人でも知っている人が多い場所でもある。
それは標高２０５７メートルという、かなり高い位置に作られた都市として、とても謎の多い場所でもあるからだ。
標高２０５７メートルというとピンと来ない人も多いかもしれないけれど。
富士山の五合目（自動車道の終点）がだいたい標高１４００～２３００メートル。
つまり、富士山の登山口付近がその高さだと思ってくれればいい。
そんな高さに都市を作ったのである。
何故こんな高さに都市を作ったのか？
どうやってこの都市を作ったのか？
など、これまた不思議な場所とも言える。
その不思議な都市にオーパーツがある。
それを発掘する為の大会なんてのが開かれてしまった。
参加資格はマチュ・ピチュに来る事。
参加人数は3人一組。
まるで僕達を呼んでるかのようだ。
なんとしても行かなくてはならない。
「あの、少し問題があるのですが」
問題？
「これ。開催時期なんですが」
来週の火曜日からか。
「これが？」
「あのですね。私達学校があるじゃないですか」
あぁ。

そういう事か。
「それなら学校を休む」
「え！？そんなにあっさりと」
「いいんだ。確かに学校は大事だけど。今はもっと大事な事があるんだ」
そう。
それはディルスを止める事。
あいつがオロチ・システムを完成させようとしているのは間違いない。
その為に必要な物を今は集めているんだろう。
そして、それにはオーパーツが必要なんだ。
だからこそ、僕達の行く先で会うんだ。
それならば、奴を止めるしか無い。
そして、それは水晶のドクロが鍵だ。
あれは集めたら宇宙の真理が分かるなんて物じゃない。
もっと、オロチ・システムに対抗するような事かもしれない。
だからこそ、ディルスと因縁のある僕達の前に出てきたんだ。
「嫌なら付いて来なくてもいい。でも僕と美喜子は学校を休んででも行く」
まず間違いなく、美喜子も僕の意見に賛同するはずだ。
美喜子もディルスを許せないし。
「嫌なんて言っていませんよ」
やれやれ。
どうやら、ここにも賛同する人がいたらしい。

第6章　3話

ついにやって来たマチュ・ピチュ。
すでに多くの人々が集まっている。
やはり古美術や考古学の人達を中心に例のチラシを配ったんだろう。
ここにいる人達全てが僕達のライバルであり、彼ら達から見れば僕達がライバルとなる。
結構いるな。
いろんな種類の人達がいるな。
まぁ、向こうからすれば僕達の姿も珍しく映っているだろうけど。
何せ集まっている人達は大人や高齢の人達が目立つ。
たぶん１０代なのは僕達だけだろう。
「おや？リンドウじゃないか。あんたまで来るなんて」
おや？
林道さんを知っている？
「もちろん。何せ私以上に本物を鑑定出来る人なんていませんから」
そうか。
林道さんはそう言えばその能力で鑑定をやっていたっけ。
「私、この世界では知らない人がいないくらいなんです。中には高額の謝礼を払ってでも、私の鑑定能力に頼る人もいるので」
なるほど。
「そうそう。理恵子の家は昔から続く鑑定家なのよ」
だから林道さん家はお金持ちなのか。
さすがに美喜子は林道さんと仲が良いだけに、よく知っている。
こういう古美術の世界ではお金持ちが多い。
彼らは大金を出してでも本物を知りたいと思っている。
そういう人達と人脈があれば、そりゃ船を持つほどお金持ちにもなるだろう。
他にも林道さんを見ている人達が多い。

そろそろ開催時間だ。
さて、何が起こるんだ？
ディルスが関わっているとなると、無事に終わる訳が無い。
「うわぁあああ！！」
なっ！？
何だ！？
「ば！化け物だ！！」
何かに追われている。
あれは・・・？
白い毛に覆われたゴリラほどの大きさのある生き物だ。
そいつが鋭い牙を見せながら追いかけている。
これが開催のスタート合図って訳か。
「逃げろ～！！」
だが。
周りから沢山の化け物が集まって来る。
こうなると。
マチュ・ピチュの中に逃げるしか無い。
とんでも無い事を考えてやがる！

第6章　4話

僕達はマチュ・ピチュの中にある建物の中へと非難した。
どうもこの建物の中には入って来れないようだ。
一体何がどうなってるのかは分からないが。
ここはそれほど特別な場所なのか？
辺りを見渡すが。
それほど特別のようには見えない。
もっとも、この場所がすでに特別という事かもしれないが。
「おい！地下へ通じる階段があるぞ！」
地下だって？
マチュ・ピチュに地下？
そんなの聞いた事も無いぞ。
「もしかして、この先にオーパーツが？」
それでここに入って来れないのか？
ったく。
今回はまるっきり情報が無い。
これもまた奴の罠なんだろうか？
ともかく。
行くしか無いって事か。
外には、沢山の化け物が取り囲んでいる。
そりゃあ、僕達が暴れればあれぐらいは片付けられるかもしれない。
だが、あれで全部とは思えないし。
それに、あいつらが水晶のドクロを持ってるとは思えない。
やはり、この地下の何処かにあると考えるのが妥当だろう。
そして。
間違いなくディルスが絡んでる。
僕達に選択権は無い。
行くしかない。

「行こう。美喜子、林道さん」
リュックからライトを取り出し中に入る。
それを見て、他の人達も後に続く。
やる事が無いのだから、探検をしようという訳か。
やはりオーパーツ発掘大会なんてのに参加するぐらいだ。
これぐらい行動力が無いと困るのだろう。
でもこうなると。
彼らはライバルでは無い。
何せあんな化け物がすでに出ているのだ。
これから先の足手まといにならない事を祈るしか無い。
先の見えない地下通路。
はたして何が待っているのやら。

第6章　5話

やはりというか。
僕達と一緒に来たのは入り口だけで。
後は各々3人一組で動いている。
この辺りはやはり3人で来ているからだろう。
僕達もあまり他の人達に気を配っている場合でも無いし。
とにかく、奥へと進もう。
林道さんは相変わらずほうきを持っている。
見た目には普通のほうき。
これが武器だなんて分かんないんだろうな。
つまり、こっちはすでに臨戦態勢。
何せすでに化け物が出てきている。
この奥の方からも化け物が出てこないとは言えない。
僕達は慎重に奥へと進む。
ん？
何か見える。
なんだ？
あれは！？
姿は2メートルほどもある円柱のような形に左右に3本ずつ、計6本の触手がついている化け物が動いている。
そいつが3匹も。
また、見たことも無い化け物だな。
動きはそれほど速くは無いが。
不気味な化け物である事は間違いない。
でも。
相変わらず美喜子は素手で突進をする。
「てぇい！」
この辺りの思い切りの良さは美喜子の長所だな。

でも何か危険な感じがする。
これは気のせいで済んで欲しいが。
「はぁ！」
まずは1匹を殴って倒す。
さすが。
「次！」
だが。
その2匹目は、かなり美喜子に接近していた。
触手が美喜子に触れる。
「なっ！？」
何が起きたんだ？
見た所、痺れてる訳では無い。
普通に動いている。
だけど、美喜子は一旦僕のいる所まで下がる。
「？どうした？」
「やばい・・・あいつの触手に触ったら、力が入らないのよ！」
なんだって！？
まずい！
こうなると前線は林道さん一人になる！

第6章　6話

「くっ」
美喜子がまったく力が入らない状態になっている。
やがれ倒れ込むように座ってしまう。
立ち上がる事も出来ないようだ。
まずい！
「きゃっ！」
なんだ！？
あっ！
林道さんもやられている。
この化け物の前に、前戦の二人がやられた。
このままだと二人がやばい！
僕がやるしかない！
「炎の精霊よ！」
いくぞ。
「ファイヤー・レーザー！」
よし！
なんとか倒せた。
「大丈夫かい？」
「山本さん。この痺れはしばらくは消えないみたいですよ」
ぐったりと倒れつつも林道さんがそういう。
そうか。
奴に触られたという事は、そこから情報を得たのか。
転んでもただでは起きない人だな。
それぐらいじゃないと、この冒険は生き残れない。
まいったな。
しばらくはここで休憩だな。
「計画通り」

なっ！！
この声は！
「これで、しらばくその二人は使い物にはならない。あとはお前だけだ」
氷室！！
「お前がここで出てくるとはな」
もう少し先なら予想していたかもしれないが。
ここはまだ入り口付近。
不意打ちもいい所だ。
「当然だ。お前はここで死ぬのだ。邪魔な二人はその瞬間をただ眺めているだけの観客にするため」
くっ！
確かに今は二人はまったく動けない。
今戦えるのは僕だけだ。
しかし。
何故、僕なんだ？
３人まとめてならまだ分かる。
しかし氷室の今の台詞からは、僕しか狙っていない。
どういう事だ？

第6章　7話

かなりやばい状況だ。
前線で戦えるはずの美喜子と林道さんがモンスターのせいで、とても戦える状況では無い。
つまり僕だけで氷室百合恵と戦わないといけない。
しかもその氷室は、僕を殺す気で満々だ。
かなりやばい。
まさか、これが狙いでこのオーパーツ発掘大会を開いたのか？
しかし不可解な事もある。
「待て！何故、僕なんだ？」
そう。
ここで全滅させるなら分かる。
だけど、氷室は僕を殺すとは言ったが他の二人は何も言っていない。
「決まってる。お前達の中で一番危険なのはお前だからだ」
僕！？
美喜子じゃなくて？
「お前は一番最初に出会った時に、とにかく抑えて来ただろう？」
「それは当たり前だろ？」
正体の分からない相手とは戦いたくない。
例えそれが子供の頃からの宿敵だとしても。
「私達はお前らの幸せを壊した相手だと認識している。だがお前は能力者相手の戦い方を心得ている。相手も能力者であるなら、下手に手を出さずに能力を見極めないと死ぬからな」
うん。
僕も同じ意見だ。
ディルスと氷室の力が分からない以上。
むやみに攻撃すべきじゃない。
なんとか能力を調べないと戦いようがない。

「そういう奴が一番危険なのだ。それにお前の能力は応用が利くようだし」
そうだ。
僕の能力は力が弱いが、かなり応用が利く。
「だから、お前が死ぬ事は決まっている」
え？
決まってる？
まさか。
「氷室、まさか未来が見えるのか？」
そうとしか思えない言葉だ。
殺し屋というのは知ってるが。
「今の言葉で分かったのか？」
「死ぬって言葉は聞くが”殺す”って言葉を聞いていない。それでなんとなくだが」
普通は殺すって言うもんじゃないか。
なのに、ずっと死ぬとかしか言っていない。
そこで予想はしていたが。
「やはりお前は危険な人物だ」

第６章　７話（後書き）

次回更新は１月１６日（月）予定です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3757j/

奇妙な日々

2012年1月9日19時53分発行